勝利の伝説シェブロンラインは最高級品の証。

"Chevron-Line" ist der Beweis höchster Qualität.

hummel®

勝利をめざすなら、選ぶべきだ!

——————無言の威圧感を与えるヒュンメル——————

DOUBLE SCORE

総発売元　株式会社ダブルスコア

大阪市天王寺区上汐5-4-22 〒543 TEL.(06)772-2777

フランスナショナルチーム来日決定

ジェルマン監督率いるフランスチームは、強豪チームがひしめきあうヨーロッパの中で急激に力をつけてきている。

今年2月に男子ナショナルチームがヨーロッパ遠征をした際、フランスナショナルチームと対戦し勝敗と星を分けている。この結果からも、フランス戦は好ゲームが予想される。

フランスは、キャプテンのジェオフロワを中心に、カイユウ、セリネ、クリオルなどがスピーディな攻撃を展開することが予想される。

市原全日本男子新監督率いる全日本チームが迎える初めての国際試合でもあり、11月に予想されるロサンゼルス・オリンピックアジア予選を展望する上で重要な試合となろう。

以下、予定されている日程を紹介する。

【日程】

7月15日　来日
16日　対湧永製薬（大阪）
17日　対全日本（横浜）
20日　対徳山クラブ（徳山）
23日　対全日本（名古屋）
26日　対全日本（東京・駒沢）
27日　帰国

全日本女子ジュニア世界ジュニア選手権出場を決める！

10月にフランスで開催される世界女子ジュニア選手権大会の出場権をかけての中国台北との試合は〝敵地〟に乗り込んで5月16、17日の両日にわたって2試合を戦い連勝で出場権を獲得した。

以下その戦いの模様を紹介する

▽第1戦　＜5月16日＞

日　本 24（12－11, 12－7）18 中国台北

昨年のインテラムニア・カップ（イタリア）出場をはじめ、数多くの国内合宿などで強化に励んできたが、やはり初めて体験するタイトルマッチのプレッシャーは大きく、国内の高校チームクラスの実力程度と思われた中国台北チームに苦戦を強いられた。〝乗り越み〟に加えてオーバーステップなどの規準で大きく食い違う韓国ペアのジャッジングにとまどったこともあるが、苦戦の要因は、ほとんど自らのイージーミスが招いたものであり、反省材料の多い第1戦であった。

いきなりスタートで中国台北のキャプテンでエースの劉玉芬に連続ゴールを許して守勢に回ったが、GK広瀬の好守を足がかりに若水、秋成の鋭い攻撃で2対2のタイ。これで勢いづくかと思われたが、攻守のコンビネーションがかみ合わず、劉の個人技を中心に攻め込んでくる中国台北に、再三ポストの甘いディフェンスをつかれ、なかなか主導権が奪えなかった。

この重苦しいムンドを断ち切ってくれたのが小兵・若水。ポスト、サイド、あるいは速攻と、神出鬼没の動きで中国台北ディフェンスを撹乱し、4対7から貴重な3連続ゴールでペースを日本に呼び込んだ。加えて広瀬に代わったGK岡本も堅い守りで得点を許さず、中田のミドル、小口の速攻、山岸のロングを引き出して12対7と前半を優位に折り返した。

後半も幸先きよく武藤から塩屋へ渡るポストへのパスプレーで6点差。

しかし、館内いっぱいに詰めかけたファンの大声援を背に、中国

『ハンドボール』58年6月号（第219号）目次

フランスナショナルチーム来日決定……(1)
男・女監督　その決意を語る……(4)
第24回全日本実業団選手権……(6)
第8回日本リーグの話題を探る……(10)
関東ジュニア研修訪独旅行を終えて小西、原ほか……(14)
海外トピックス……(20)
西ドイツ協会機関誌よりのレポート……(22)
関東学生春季リーグ戦……(26)
私の新著紹介……新井節男……(28)

台北もよく粘って反撃。エリアぎわの執ようなプレーでPTをものにしてはジリジリと点差を詰めていった。ポストで倒れこまれればPT、あるいは失点というジャッジングを覚悟しなければいけないのに、詰めの甘い中途半ぱなディフェンスを繰り返し、若い中国台北チームを勢いづかせてしまったのがまずい。後半5分14－9から5分間で15－12と3点差につめよられ、さすがに各選手に焦りの色がうかがわれた。

ここで日本は、中国台北・劉のパスワークと、中央へと偏ってくる攻撃に対抗して、それまでサイドに回っていた若水をトップに上げ、0－6から1－5ディフェンスへとシフトチェンジ。それまで快調なリズムで攻撃していた中国台北のペースを崩す作戦だったが、これが思いのほか効いた。2点差につめよる速攻ノーマークを失敗した中国台北の動揺をすかさずついて、小口がポストから倒れ込んで4点差。さらに若水、吉岡の速攻でたたみかけ、後半14分18－12と足の止まった中国台北に水をあけた。

まだ体力的に十分鍛えられていない中国台北のスタミナ切れをつく、絶好のチャンスであり、続いて21分劉の速攻ゴールを許したものの、日本は、小口のミドル、中田の速攻、山岸、武藤のロング連発と一気にエンジン全開、22－13と9点差をつけ、第1戦の勝利を不動にした。

だが、この後がいけない。こうなれば第戦のためにも、さらに〃貯金〃して終わりたいところで、ともに若いジュニアとあればささいなことで大きく試合の流れが変わってしまう。まして明らかに中国台北よりのジャッジングとあれば、第2戦のために、貯金はいくらあってもよかった。

しかし、2ケタリードを目前にした24分過ぎから、中国台北・襄素風、劉のPTとミドルを許して3連続失点。この間、日本は再三のノーマークチャンスがありながら、GK陳淑媛にことごとくシャットアウトされ、足踏み状態が続き、さらに時実2分間退場の間にも、陳莉莎、徐孝貞に打ち込まれ、2ケタリードばかりかあっという間に6点差につめ寄られてタイムアップ。中国台北側に「やれる！」の勢いをもたらせたまま終了という後味の悪い幕切れで第1戦が終わった。

▽**第2戦**　＜5月17日＞

日　本 24（11－6 13－11）17 **中国台北**

前日成功した1－5ディフェンスで日本はスタート。いきなり武藤が45度からロングを叩き込んで好出足を見せたが、前日、相手を調子づかせた格好で終わっていただけに、この日の中国台北は第1戦を上回るデキ。素速い帰陣と、ロング、ステップにポストを織りまぜる攻撃で、徐孝貞、田美華が連取、その後も中国台北はGK陳淑媛の好守や、エース劉のシュート、さらには日本の退場を巧みについた劉、襄の連続速攻などで、日本は8分5－3と劣勢を強いられた。

ムードメーカーとして期待する中田を投入するなどして挽回に出る日本だったが、オーバーステップ気味に強引に割ってくる中国台北のカットイン攻撃に苦しみ、攻めても浮き足立ってパスミスなどのイージーミスが続き、18分6－3、22分7－11と中国台北の快調な攻撃ばかりが目立ったゲーム展開。

前日の6点差の〃貯金〃も徐々に〃目減り〃していった。

しかし、ここで日本に絶好のチャンスが訪れる。中国台北・孫家茜が秋成のカットインをマークして2分間退場を宣せられたのだ。「この場面しかない」とこん心の力をふり絞って打って出た秋成のジャンプシュートで攻撃ののろしをあげた日本は、素晴しいプレーを次々と繰り出した。秋成に続いて小口の胸をすくような連続速攻が決まってこの2分間で3連続ゴール、さらに孫が復帰後も、速攻リズムをつかんだ日本は、激しいディフェンスから中国台北のシュートミス、オーバーステップなどを誘い、マイボールを粘り強く速攻につないで中田、吉岡が会心のゴール、あっという間に13－11と逆に2点差をつけ、前半を折り返した。

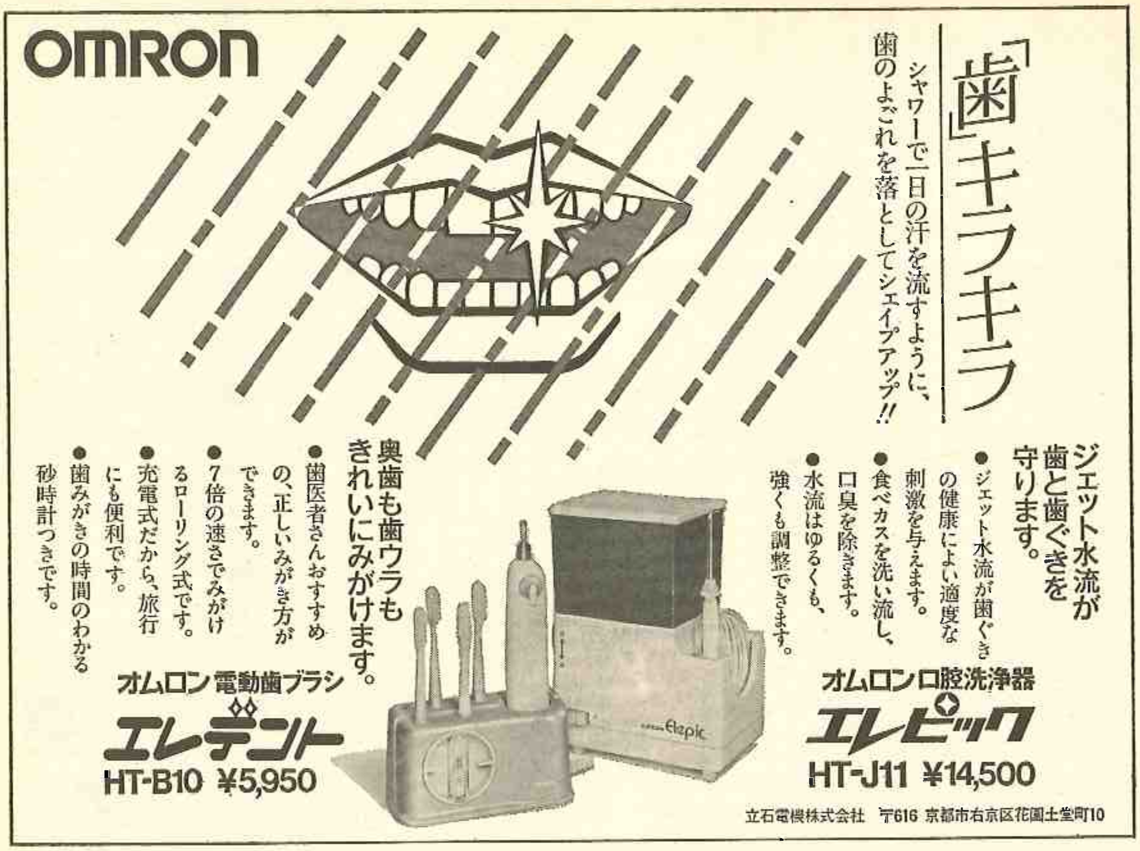
6－9の劣勢の場面から、GKを岡本から高校卒1年目の大西に代えたが、これで「守らねば」の気持が全員に乗り移り、積極的なディフェンスを展開できたことが好結果につながった。よい守りがよい攻めを生むのたとえどうり、持ち味の速攻を連発させた日本は、完全に主導権を握って後半を迎えることができた。

後半も開始早々にフォーメーションから左腕・高木が倒れ込み、さらに武藤がガツンとロングを決め、反撃を狙う中国台北の出バナをくじき、その後も、徐孝貞、鄭明蘭のサイドで食い下がる中国台北に対し、小口のミドル、さらにはコート縦横のすばしこい動きで大評判を得た若水の俊敏なプレーなどで着々と加点、16分21－15として「フランス行き」を確定づけた。

日本はキャプテン秋成を軸にようやくこの第2戦の前半終盤から本来の動きを取り戻し、若水、中田、小口らの小兵陣の活躍に加え、GK岡本も中国台北の追撃をピシャリと断つ好守を見せ、24－17で2連勝を飾った。

―6月の黒板―

- 1日　コーチ会議
- 10日　第8回日本リーグ前期開幕
- 11～12日　B級公認審判テスト（京都）
- 18日　常務理事会
- 19日　A級公認審判テスト（東京）
- 24～25日　B級公認審判テスト（神奈川）
- 28～30日　第15回自衛隊選手権（東京・駒沢）


OMRON
「歯」キラキラ
シャワーで一日の汗を流すように、
歯のよごれを落としてシェイプアップ!!
ジェット水流が歯と歯ぐきを守ります。
●ジェット水流が歯ぐきの健康によい適度な刺激を与えます。
●食べカスを洗い流し、口臭を除きます。
●水流はゆるくも、強くも調整できます。
オムロン口腔洗浄器
エレピック
HT-J11 ¥14,500
奥歯も歯ウラもきれいにみがけます。
●歯医者さんおすすめの、正しいみがき方ができます。
●7倍の速さでみがけるローリング式です。
●充電式だから、旅行にも便利です。
●歯みがきの時間のわかる砂時計つきです。
オムロン電動歯ブラシ
エレデント
HT-B10 ¥5,950
立石電機株式会社 〒616 京都市右京区花園土堂町10


便利です。ダイワキャッシュカード。
お預け入れに…
お引き出しに…
お振り込みに…
ダイワキャッシュカード1枚で、現金のお預け入れ、お引き出し、ダイワ本支店や※他行へのお振り込みなどがスピーディにすませられます。通帳もハンコもいりません。ハンディな1枚、あなたもお持ちになりませんか。
あなたと明日を
預金も 信託も…
大和銀行
※他行へのお振り込みは、あらかじめ登録が必要です。

男女監督 その決意を語る

ロサンゼルスオリンピック アジア予選に向って——

日本ハンドボール界の総力あげて戦おう

■男子監督・市原則之

今般図らずも男子ナショナルチームの監督を務めることになったが、その大役に身の縮まる思いをしている次第である。

現在日本ハンドボール界にとっては、ロス・オリンピックのアジア予選を控えて、その勝敗により将来の日本のハンドボールの国際舞台への道が占える極めて重大な時期にあり、果たしてこの短期間で微力な自分に一体何が出来るか、本心不安である。

客観的にアジアのスポーツ界を展望してみても、昨今の中国、韓国の活躍ぶりは全く目を見張らされるものがあり、両国共スポーツを政治、経済他多岐にわたり国策として利用し、特に韓国においてはその延長をアジア競技大会並びにオリンピックの開催までに発展させ、国民のスポーツ熱は益々盛んとなり、その意気は量り知れないものがある。

ことハンドボールにおいても然りで、日本の関係者の中では男子は未だ中国、韓国には勝てるだろうという楽観的な考え方を持っている人がいるが、私は一昨年のジャパンカップで既に両国に完全に追いつかれていると確信している。

それでも昨年のアジア競技大会で、日本が中国に敗れるまで何とか勝利を収めてこられたのは、国際経験の一日の長と、日本チームのスタッフ及び選手たちの意地以外何物でもないと思考する。

現時点ではどうか。いうまでもなく両国のその後の国家的強化対策に日本は完全に追い越されているといっても決して過言ではあるまい。従って、今ここで日本の総てのハンドボール関係者がこの危機状態を認識し、総てのハンドボール愛好者が結束して、あらゆる私心を捨てて純粋な英知を結集させ、この危機からの脱出を計らなければならない。

ここで誠に恐縮であるが手前事を述べさせて頂くと、此度の監督をお引き受けする過程では、私個人にとって色んな問題が山積されていた。とりわけ仕事の問題は真剣に悩まざるを得なかった。〃多くのナショナル選手を持つ企業の社会的責任として〃というオーナーの温かい理解があっても、個人的には、男が40歳を過ぎると自分の職場においては、将来の分岐点に立たされ、その方向により進路が決定されるべき重大な時である。プロスポーツならともかく、アマチュアスポーツであれば、最終的には職場に帰属しなければならず、その時の職場での姿勢によって、それまでのスポーツ人生の評価が下される。従って自分は、好む、好まざるに係わらず将来を見極めて仕事に専任していた矢先であった。

しかし、日本ハンドボール界が直面している危機と、今日までハンドボールで育ててもらった恩恵を勘案し、また、モスクワを幻に終えた選手の為にも、敢えて個人を捨てて、非力ながらも予選までの数カ月間精魂を傾ける決心をした次第である。

幸せにも、チーム造りに不可欠なコーチも、近森(三陽商会監督)、野田(大同特殊鋼監督)の両氏を迎えることが出来、誠に心強い限りである。彼等の技量は今更申し述べるまでもないが、選手時代よりの勝負根性と集中力にも特筆すべきものがあり、現在もその特性を十分に発揮し、国内では屈指の指導者であることはその実績が示す通りである。また、あの燃焼したミュンヘン時代の魂を現在のナショナルチームに注入してくれる、正に短期決戦に好適な人材である。

加えて、総務コーチとして一宮氏(日体大監督)の協力を得ることが出来、彼の温厚、誠実な人柄は悲壮感が漂うであろうナショナルチームにあって、唯一のリラクゼーションの役割を果たし、選手たちのよき相談相手になってくれることと期待している。

これら3名のコーチもそれぞれ自分の職場では、おのおのの問題を抱えていることと推察される。しかしながら、このハンドボール界の窮状を救うため、個を捨て自らを犠牲にして、燃えたぎる炎の中に飛び込んでくれる誠に頼もしい人たちである。今後はこのスタッフが同心となり、競技と一体となって来るアジア予選の勝利の為に渾身の力を結集させる所存である。とにもかくにも日本ハンドボール界の総力戦である。関係各位の絶大なる協力をなくして勝利を収めることは不可能である。このことを肝に命じて、全国のハンドボール愛好者が総てコーチであり、監督であって頂く様念願し、ご指導を乞う次第である。

今後のチーム造り等の強化対策は、強化部長を中心にスタッフ全員で鳩首検討を重ね最良の方法を生み出して行く所存であるが、基本的には短期決戦型の強化に集約させざるを得ないであろう。

スポーツ界でも企業でも管理、監督者たるものが新しいポストに歴任した時は、当然のことながら長期的に3つの作業を行なわなければならない。

その1つは、前任者の蒔いた種を育てる。2つ目は、育てたものを有効に利用し、自分の発議で仕事を為す。3つ目は、後任者のための種蒔き。

以上の3点を将来の大事業の完成のために、各指導者が長期的に連繋して行なわなければならず、特にスポーツにおける人材育成はこのことが大変重要である。今日のナショナルチームを育て上げられた竹野監督も、この思想で数多くの優秀選手を育ててこられている。しかし、今般は、極めて期間が少なく、残念ながら1と3を行なう余裕はなく、総て2に集中し

なければならない。

そのためには現在国内の第一線で活躍中の即戦力となる個性豊かな選手を選抜して、短期間でチームワークを整え、"燃える軍団"に仕立て上げることが急務となる。従って、結果的には日本リーグの上位チームを主体とした選手選考にならざるを得ないであろう。

また、その選考方法も単なる技量だけにとらわれず、所属チームでリーダーの役割を果たし常に積極果敢なプレーをしている人、また、格闘技的要素の強いハンドボールに必要な闘争本能の旺盛な人等、精神的に逞しい人を優先させたいと考えている。

何れにせよ、日本ハンドボール界の命運を賭けた勝負であり、戦いである。そこには、スマートとか、華麗とか一切の麗句は必要としない。

要はチーム一丸となって泥まみれの勝負に挑み勝利を呼び込むだけである。

今後の合宿とか、練習方法については、情報化時代の今日あまり具体的に明記することは得策でないのが差し控えるが、少なくとも強靱な精神力の養成のために、従来までのナショナルチームの総ての固定観念、既成概念を取り外した方策をとりたいと考えている。

以上の様な固い決意で、この非常時の栄えあるナショナルチームの監督に専心努力する所存でありますので、選手が所属する各チーム並びに関係各位には多大なるご迷惑をお掛けすることと存じますが、何卒この趣旨をご理解頂きよろしくご協力並びにご指導ご鞭撻を賜ります様お願い申し上げます。

■女子監督・井　薫

新しい技術の修得体力の向上に取り組む

①いかに戦って、勝つか
監督としての抱負について
②短期間の強化策について
(イ)チーム像
(ロ)チームづくりの基本方針
(ハ)具体的な強化日程
(ニ)コーチの役割

私はこのような原稿依頼に関しまして、素直に抱負、強化策を述べるのは易しい事ですが、監督の立場としては、如何にお答えすべなのかを考えてみました。

それは次のような事に起因します。

元来スポーツにおける勝負は、速さ、高さ、強さを競うもので、個人、団体の種目を問わず、相手を上廻る技術、体力、精神力等が求められ、加えて戦法、戦略の巧拙が勝負を左右する大きな要因となります。特に、ボールゲームでは相手の戦力やスタッフの作戦等に関して、戦力の分析及び戦略の解明がゲーム開始以前の重要な部分である事は、すでに皆様もご存知の通りです。

つまりコンピューターに入力するデータが多彩で豊富であれば、それだけ信頼に足りる解答が望める事と同様に、対戦相手の情報、データは大小に係らず価値があるもので、そのデータの物語る、相手の傾向に対策を講じる事は当然であり、有利に戦いを展開する第一歩であると思います。

そんな状況下で、日本のナショナルチームにとって極めて不利な事は、メンバーの体力や能力の個人カルテや、ゲームの内容、個人の成績等がVTRのテープや、機関誌、研究発表の発刊物として数多く、ライバル国に流出している事実です。

そして、それらの限りない流出に比して、韓国、中国の情報の入手は皆無に近い状態であったのが従来のパターンで、これでは戦う前から数点差のハンディを背負っていたとも考えられます。そこで、その対策として私は今後次の二つの事を実行したいと思っています。

まず、情報流出は現状では仕方ないとしても、無定見に強化方針や日程、戦力の紹介、評価等は行なわず、必要であれば最小限に止めるか、十分承知の上で行ないたい。

次に、困難ではあるが情報収集と分析処理もコーチの役割の中に位置ずける。この点を韓国に限っていえば、昨年5月、日本でのアジア予選、更にハンガリーでの世界選手権大会の韓国チームのゲームの全テープを入手済みである事と、国内の韓国通の複数のルートから、新らしく詳細な情報の提供もあったりで、これまでとは幾分違った環境づくりとも出来つつあり嬉しく思っています。もっとも、昨年のゲームのテープあたりが全面的に参考になるとは思いませんが、友人のマイコン狂にいわせると、本人やチームで気づかないプレー中の癖や、今後こんな方向に進むであろうとの予知等も、意外な程つかめるとの助言もあり、その協力も得て成果を期待したいと思います。

ただ、これまで述べてきた部分は、ゲームが始まるまでの準備、対策のひとつであり、本当の戦いはコート上での競技にある訳ですが、反面、そんな部分での水面下の戦いはすでに始まっている事もご理解下さい。そして、ナショナルチームの活動、勝負の帰趨を国益と考え、国の施策として強化を計る国と、国からの補助はあっても、ほとんど、各々の種々団体の力と、選手が所属する企業等の理解によって進められる日本のナショナルチームの現状は、やはり彼我、大きな差があるのも事実ですし、それでも、どうすれば日本のハンドボールが盛んになるのか、盛んになれば強くなるのか、このテーマを多くの人が考え、その情熱がナショナルチームを推進しているのも、また事実なのです。

全日本女子はメンバーも大幅に代ります。ジュニアの基盤が確立した事で、若手の登用を多くする体制が整いつつあり、それは長期展望での強化を推進する上で、大きい効果があると思います。

多くの先輩たちが築いた日本独自の戦法と、急ピッチで大型化する外国勢に、戦いを挑むための、新らしい技術の開発や修得や、体力の向上に、全員が本当に真剣に取り組む事が少くとも、韓国、中国を追いかける立場の、日本の第一歩の強化姿勢であると思います。

そして、常に勝負の結果を問われるナショナルチームですが、コートの外では、現代の女の子のグループとして、良い意味での華やかさ、爽やかさの漂うチームカラーで、多くの人に親しみを感じられるチームづくりを、コーチの諸氏の協力も併せてつくって行きたいと思います。

第24回全日本実業団選手権

男子の部 ―― 5月1〜3日（愛知県体育館）

湧永製薬3年連続5回目の優勝

戦評　近藤金博

5月のゴールデンウィークを利用してのこの大会は、花と新緑につつまれた名古屋城に隣接した愛知県体育館において行なわれた。開会式には会場のメッセージとしてロサンゼルス・オリンピック予選の年であり、この大会にはナショナルの主力選手のほとんどが出場するとあって、全国のハンドボーラーの注目と期待は大きい旨のことが専務理事の挨拶があり、選手の闘志の盛り上りが感じられた。

印象に残った試合

開会式直後の第1試合の中村荷役対トヨタ自動車は、両チーム共よく走り、速攻の連続であったがこの大会初参加であり、川田選手の大活躍で若さのトヨタ自動車が勝った。今後大いに期待出来るチームだ。

2回戦の日新製鋼対三陽商会は、西山（日新）と関（三陽）の対決のようなゲームであったが、日新が西山を泉、洞ケ瀬がうまく生かして、残り時間8分間で勝負を決めた。

準決勝湧永製薬対本田技研鈴鹿は、井藤（湧永）大畑（本田）の好守の目立ったゲームで、GKの好守により試合の流れが大きく変をことを証明する1戦だった。また、大同製鋼対日新製鋼の鉄鋼業種の対決は、蒲生が田口、高村の若手をよくリードうまく使っていた。大同もこの二人に非常に大きな期待を持っていることがうかがわれた。

決勝戦は、10年連続11回目の湧永製薬と大同製鋼の対決となったが、湧永製薬はエース津川を監督にし、池ノ上、生駒、志賀の大型選手を中央に配置した体制でスタート。大同は高村の大活躍で10−8とリードしたが、後半残り時間5分ベテラン藤本、松本（湧永）が好プレーをみせ逆転、ダメ押し点を取り勝利を握った。

優勝した湧永製薬は、メンバーにほとんど変更はなく最も安定しており、優勝候補筆頭にあげられ、池ノ上、生駒のミサイルシュートは大同・蒲生と並んでオリンピックで大いに活躍して欲しいものだ。なお、シュートコースの読みの良いGK井藤の活躍も優勝要因の一つである。

準優勝の大同製鋼は田口、高村の若手起用をしており、ゲーム展開の甘さを湧永につかれていたが、今後大きな期待出来るチームである。

5月初めの大会とあって、チームプレーが完全でないチーム等もあったが、各チーム共コンビプレーに努力をされているところが試合の随所にみられた。湧永製薬と大同の2強時代といわれているが、日新製鋼、本田技研鈴鹿等も進歩めざましく、今後の対戦が楽しみだと思わせる要素が多い。今年度の日本リーグでは一波乱起きるのではないだろうか？

〔戦績〕

▽1回戦

トヨタ自動車 30（16−15、14−12）27 中村荷役

トヨタ車体 26（3−1、2−1、13−8、8−13）23 三景

▽2回戦

日新製鋼 23（11−10、12−10）20 三陽商会

本田技研鈴鹿 25（10−10、15−4）14 大崎電気

大同特殊鋼 37（20−11、17−5）16 トヨタ自動車

湧永製薬 31（15−2、16−7）9 トヨタ車体

▽順位決定戦

大崎電気 21（12−7、9−12）19 中村荷役

	【大崎】	得	【中村】	得
GK	岡部	0	飯塚	0
GK	原田	0	高橋	0
FP	東江	4	飯田	0
FP	武田	5	松本	2
FP	長野	2	坂口	2
FP	櫛田	0	西窪	5
FP	松岡	3	大木	1
FP	山本	7	大戸成	8
FP	宮崎	0	辻	1
FP	星野	0	塚田	0
FP	大沢	0	永沢	0
FP	八幡	0	窪田	0
PT	（3）	21	（2）	19

（審・伊藤、加藤）

三陽商会 23（13−9、10−11）20 三景

	【三陽】	得	【三景】	得
GK	大山	0	中村	0
GK	田村	0	野田	0
FP	関	5	犬飼	2
FP	金子	4	地主園	0
FP	田口	0	田畑	8
FP	坪子	0	溝部	2
FP	砂川	6	藤山	0
FP	山口	5	白倉	0
FP	石原	2	岡部	0
FP	望月	1	飯塚	4
FP	鵜沢	0	近藤	2
FP	亀井	0	山田	2
PT	（4）	23	（3）	20

（審・杉本、岩永）

大崎電気 25（14−7、11−7）14 トヨタ車体

	【車体】	得	【大崎】	得
GK	工藤	0	原田	0
GK	近藤	0	矢内	0
KP	山本	1	東江	4
KP	藤長	0	武田	2
KP	森岡	2	長野	4
KP	浜口	5	櫛田	2
KP	松井	1	松岡	7
KP	井上	0	山本	3
KP	石原	0	宮崎	0
KP	佐藤	1	星野	0
KP	中島	3	大沢	1
KP	大塚	1	八幡	2
PT	（0）	14	（0）	25

（審・伊藤、加藤）

三陽商会 29（14−8、15−14）22 トヨタ自動車

	【自動車】	得	【三陽】	得
GK	玉津	0	大山	0
GK	中西	0	内野	0
FP	城ケ原	5	関	9
FP	小山	1	金子	2
FP	高木	1	田口	0
FP	堀江	0	坪子	0
FP	相本	5	砂川	8
FP	近藤	0	山口	7
FP	香井	7	石原	0
FP	大川	0	望月	3
FP	久本	0	鵜沢	0
FP	松永	3	亀井	0
PT	（1）	22	（1）	29

（審・杉本、岩永）

▽準決勝

大同特殊鋼 19（10−7、9−9）16 日新製鋼

得	【大同】		【日新】	得
0	上村	GK	西川	0
0	柳川	GK	谷	0
0	田中	FP	泉	2
2	田口	FP	吉見	2
2	小野	FP	洞ケ瀬	1
4	柳川	FP	脇若	0
3	大原	FP	日野	0
1	中本	FP	森	2
0	河井	FP	一瀬	0
4	蒲生	FP	高木	4
0	市川	FP	西山	4
3	高村	FP	藤井	1
19	(1)	PT	(0)	16

（審・幸田・新井）

湧永製薬 18（8−4、10−7）11 本田技研鈴鹿

得	【本田】		【湧永】	得
0	大畑	GK	大城	0
0	中尾	GK	井藤	0
6	佐々木	FP	池ノ上	2
2	三本松	FP	生駒	3
0	喜井	FP	穂積	0
0	豊岡	FP	藤本	0
0	長野	FP	志賀	0
0	玉井	FP	中川	0
0	栗屋	FP	松本	2
1	猪野	FP	山本	3
0	坂本	FP	原田	0
2	尾上	FP	檜原	0
11	(0)	PT	(0)	10

（審・川島・森）

▽9位決定戦

三景 23（14−9、9−9）18 中村荷役

得	【中村】		【三景】	得
0	飯塚	GK	中村	0
0	高橋	GK	野田	0
0	飯田	FP	犬飼	9
1	松木	FP	地主園	3
1	坂口	FP	田畑	7
1	西窪	FP	藤山	1
1	大木	FP	白倉	0
7	下戸成	FP	岡部	0
2	辻	FP	飯塚	1
2	塚田	FP	近藤	2
1	永沢	FP	山田	0
2	窪田	FP		
18	(2)	PT	(1)	23

（審・伊藤・加藤）

▽7位決定戦

トヨタ自動車 25（11−10、14−10）20 トヨタ車体

得	【自動車】		【車体】	得
0	玉津	GK	工藤	0
0	中西	GK	近藤	0
8	城ケ原	FP	山本	3
2	小山	FP	藤長	3
2	高木	FP	荻原	1
0	相本	FP	森岡	3
1	近藤	FP	浜口	3
0	鈴木	FP	松井	2
3	川田	FP	石原	0
6	香井	FP	佐藤	0
0	大川	FP	中島	1
3	松永	FP	大塚	4
25	(3)	PT	(1)	20

（審・川島・森）

▽5位決定戦

大崎電気 23（13−9、10−6）15 三陽商会

得	【大崎】		【三陽】	得
0	岡部	GK	大山	0
0	矢内	GK	田村	0
4	東江	FP	関	6
1	武田	FP	金子	0
7	長野	FP	田口	1
0	櫛田	FP	坪子	1
6	松岡	FP	砂川	1
5	山本	FP	山口	4
0	宮崎	FP	石原	1
0	星野	FP	望月	1
0	大沢	FP	鵜沢	0
0	八幡	FP	亀井	0
23	(1)	PT	(1)	15

（審・幸田・新井）

▽3位決定戦

日新製鋼 27（14−11、13−11）22 本田技研鈴鹿

得	【本田】		【日新】	得
0	大畑	GK	西川	0
0	中屋	GK	谷	0
4	佐々木	FP	泉	1
4	三本松	FP	吉見	0
1	喜井	FP	洞ケ瀬	0
1	豊岡	FP	脇若	0
1	長野	FP	日野	3
0	玉井	FP	森	1
2	粟屋	FP	甲斐	0
5	尾上	FP	高木	10
1	猪野	FP	西山	11
3	坂本	FP	藤井	1
22	(2)	PT	(2)	27

（審・川島・森）

▽決勝

湧永製薬 20（8−10、12−7）17 大同特殊鋼

得	【大同】		【大同】	得
0	大城	GK	上村	0
0	井藤	GK	柳川	0
4	池ノ上	FP	田中	0
4	生駒	FP	田口	3
3	穂積	FP	小野	1
1	藤本	FP	柳川	2
1	志賀	FP	大原	2
0	中川	FP	中本	2
4	松本	FP	蒲生	5
3	山本	FP	海江田	0
0	原田	FP	市川	0
0	檜原	FP	高村	2
20	(1)	PT	(3)	17

（審・幸田・新井）

女子の部 ——5月25～27日（大阪市中央体育館）

立石電機3年連続4回目の優勝

戦評

近藤金博

第24回全日本実業団ハンドボール選手権女子の部は、5月25、26、27日の3日間、大阪市中央体育館において行なわれたが、女子も男子同様ロサンゼルス・オリンピックのアジア予選を今秋に控え、選手、監督ばかりではなく関係者も大いに熱が入っていた。しかし女子選手の新旧交替も多く、立石では木下、姫野選手、ジャスコは横山、辻本選手、ブラザーは植田、則武選手やピクター、大崎等ほとんどのチームがレギュラー選手の引退させたが、将来有望な新人も数多く入って来ており、この穴がどれだけ埋められるかが大きなみどころでもあった。

決勝戦は、立石対ブラザーとなり、この大会初の顔合せである。ブラザーは前半固くなり、パスワークが単調となり、イレシュ、薮田、岩村の並ぶ防禦の壁が厚く苦戦、これに対し立石は、決勝出場経験が豊富なせいか、速攻、ロング、ポストと多彩な攻撃で木下、姫野の抜けた穴を感じさせない立石ペースだった。しかし、ブラザーも増永の好リードで杏原のロングシュートで追い込みをかけ3点差までつめたが、薮内、亀園の頑張りで立石が振り切った。

今大会では、攻守共に最も安定した立石電機が3年連続(4度目)の優勝を飾ったが、イレシュ（カーヤ）のポスト攻撃で、1試合6～10点の得点力が目立つが、岩村、薮田選手にロングシュートを打てるチャンスを作ったり、防禦では守備範囲が広く守りの要となってチームをよくリードしていた事は大きい。今後各チームとも大型化になって来ているが、このカーヤの基本に忠実なプレーは大いに参考になると思われる。

また、イレシュと李相玉の外人対決の立石対大崎戦は、李相玉が多彩なシュート、パスを繰り返すがフットワークの良いイレシュの

新人のためのゲームをしよう

今大会の試合開始が午後からの日程になっているので、ジャスコの鈴木監督発案で『午前中に新人養成の為のゲームをしよう』との意見が出され、各チーム監督もこれに賛成、大阪協会の協力により今大会には参加しているが試合に出場出来ない選手の研修を目的として、単独チームまたは混成チームを編成、26、27日の2日間ゲームを行なった。チームの勝敗には関係ないが、選手の熱心なプレーをみて、各チームの監督は新人の大会も開催して欲しい意見が強かった。

女子のジュニア強化の一方法として考えれば、大いにプラスになることだろう。

うまい防禦の壁は厚く、完全にブロックされ、逆にポスト攻撃で6点取られるなど、一方的であった。

速攻の応酬で、走るハンドボールをみせてくれたのがブラザー対ジャスコ戦である。横山、辻本（ジャスコ）植田、則武（ブラザー）の主力選手が引退しているだけに迫力がやや欠けた感もあるが、ジャスコは寺沢を軸によく走ってボールを廻し、速攻につぐ速攻で攻めた。ブラザーも増永を中心によく走り、竹内の不調もあったが、杏原のロングシュート（この試合で17点中9得点）を生かしたブラザーが辛くも1点差で勝った。この試合でGK（畑添、矢部）の好守が目立った。

この大会では、全日本ナショナル及びジュニアの選手が各チームで活躍しており、それに続く次の時代の選手も多く、ロサンゼルスアジア予選に明るいものが見えて来ているように感じられた。しかし、世界のレベル（イレシュを尺度としてみると）をみると、今後に厳しいものがありますので一層の努力が必要だ。

〔戦　績〕

▽1回戦

北国銀行 18（7 11／10 6）16 東京重機

ムネカタ 21（12 9／7 8）15 大和銀行

▽2回戦

大崎電気 29（14 15／5 11）16 日ビクター本

ブラザー工業 24（11 13／6 6）12 日立栃木

立石電機 26（14 12／4 6）10 北国銀行

ジャスコ 28（13 15／3 2）5 ムネカタ

▽順位決定戦

日立栃木 18（14 4／5 7）12 東京重機

得	【重機】		【日立】	得
0	深瀬	GK	椿谷	0
0	石井	GK	葛生	0
3	中本	FP	大高	1
3	呑村	（審・杉山・吉田）	栗原	0
0	森田		西山	1
0	福島		土屋	3
0	小野		手打	2
2	沖山		前田	3
0	大前		清水	0
2	渡辺		吉田	0
1	安田		山本	2
0	矢田		山岸	6
12 (1)		PT		(2) 18

日ビクター本 12（5 7／5 5）10 大和銀行

得	【月ビ】		【大和】	得
0	渡辺	GK	高浜	0
		GK	松本	0
2	志村	FP	鈴木	0
1	中根	（審・幸田・福井）	若杉	2
2	染谷		前田	0
0	村上		若水	2
0	門脇		馬渡	0
3	武藤		天谷	0
4	長田		高橋	0
0	鈴木		西野	0
0	長谷川		秋成	2
0	池田		川添	4
12 (3)		PT		(3) 10

日立栃木 18（7 11／6 5）11 ムネカタ

得	【日立】		【ムネ】	得
0	椿谷	GK	岩瀬	0
0	葛生	GK	清水	0
2	大高	FP	藤谷	0
1	栗原	（審・吉田・杉山）	岡部	2
2	西山		吉田	0
0	土屋		小林	1
2	手打		石田	3
7	前田		大河原	2
0	清水		石田	0
2	吉田		鈴木	2
0	山本		佐藤	1
2	山岸		和知	0
18 (0)		PT		(2) 11

日ビクター本 19（9 10／4 8）12 北国銀行

得	【北国】		【日ビ】	得
0	辻	GK	渡辺	0
0	新宅	GK		
2	中川	FP	中根	3
4	八木	（審・島崎・井上）	染谷	5
0	中田		村上	0
3	竹		門脇	0
1	山崎		武藤	6
1	藤田		長田	4
1	丸山		鈴木	1
0	小玉		遠藤	0
0	貞吉		長谷川	0
0	吉田		池田	0
12 (1)		PT		(5) 19

▽準決勝

立石電機 25（13 12／9 6）15 大崎電気

得	【立石】		【大崎】	得
0	井村	GK	梅野	0
0	荒木	GK	大西	0
3	是枝	FP	西	6
0	桑原	（審・幸田・福井）	宮嶋	1
0	亀園		石井	2
6	イレシュ		渡部	0
6	薮田		徳渕	1
0	喜久山		時實	0
2	岩村		嘉本	0
4	近藤		李	4
2	江口		松尾	1
2	山内		深沢	0
25 (1)		PT		(1) 15

ブラザー工業 17（8 9／7 9）16 ジャスコ

得	【ジャ】		【ブ工】	得
0	矢部	GK	畑添	0
0	木村	GK	大薮	0
3	松岡	FP	杏原	9
7	寺沢	（審・新村・井上）	竹内	0
1	今里		赤井	0
0	野村		中村	2
3	石田		増永	4
1	仲田		太田	0
1	鷲野		松岡	0
0	宮本		塩屋	1
0	三木		森山	1
0	近藤		松下	0
16 (2)		PT		(1) 17

▽9位決定戦

大和銀行 20（13 7／10 4）14 東京重機

得	【重機】		【大和】	得
0	深瀬	GK	高浜	0
0	石井	GK	松本	0
5	中本	FP	鈴木	1
1	呑村	（審・吉田・杉山）	若杉	2
0	森田		前田	0
0	福島		若水	5
0	小野		馬渡	4
5	沖山		天谷	1
0	大前		高橋	1
1	渡辺		西野	0
2	安田		秋成	4
0	矢田		川添	2
14 (2)		PT		(2) 20

▽7位決定戦

北国銀行 12（7 5／5 6）11 ムネカタ

得	【ムネ】		【北国】	得
0	岩瀬	GK	辻	0
0	清水	GK	新宅	0
1	藤谷	FP	中川	0
3	岡部	（審・島崎・福井）	八十	4
0	吉田		中田	1
1	石田		竹	4
1	大河原		山崎	0
3	鈴木		藤田	2
2	佐藤		丸山	0
0	和知		小玉	1
			貞吉	0
			吉田	0
11 (2)		PT		(2) 12

▽5位決定戦

日ビクター本 14（8 6／9 3）12 日立栃木

得	【日立】		【日ビ】	得
0	椿谷	GK	渡辺	0
0	葛生	GK		
3	大高	FP	中根	1
1	栗原	（審・杉山・吉田）	染谷	2
2	西山		村上	2
0	土屋		門脇	6
1	手打		武藤	3
2	前田		長田	0
0	清水		鈴木	0
0	吉田		遠藤	0
1	山本		長谷川	0
2	山岸		池田	0
12 (1)		PT		(2) 14

▽3位決定戦

大崎電気 20（2 2 9 7／2 1 10 6）19 ジャスコ

得	【大崎】		【ジャ】	得
0	梅野	GK	矢部	0
0	大西	GK	木村	0
7	西	FP	松岡	2
1	大日	（審・幸田・島崎）	寺沢	2
1	宮嶋		今里	0
3	石井		野村	1
0	渡部		石田	5
4	徳渕		仲田	2
1	時實		鷲野	3
3	李		宮本	0
0	松尾		三木	0
0	深沢		近藤	4
20 (0)		PT		(2) 19

▽決勝

立石電機 20（7 13／10 7）17 ブラザー工業

得	【立石】		【ブ工】	得
0	井村	GK	畑添	0
0	荒木	GK	大薮	0
0	是枝	FP	杏原	9
0	桑原	（審・新村・井上）	竹内	1
2	亀園		赤井	0
5	イレシュ		中村	0
6	薮田		増永	6
1	喜久山		太田	0
1	岩村		松岡	0
2	近藤		塩屋	1
1	江口		森山	0
1	山内		松下	0
20 (0)		PT		(0) 17


フットワークはフォーメーションから生まれます。
だれが駆けても、
シティは、スポーツマン。
CITY
TURBO
ターボ車ナンバー1
10モード燃費
18.6km/ℓ
こんなホットな出来事は、はじめて。シティが、またまた感度をアップしました。世界初のFF1.2ℓハイパーターボ搭載です。豪快な瞬発力。一気に攻めのぼるダイナミックな走り。驚くほどの低燃費。これこそホンダの考えるターボだ、との自信をみなぎらせ、いま圧倒的な速さでシティターボが駆けだしました。時代がビンビン反応します。ネットワークがさらに拡がります。ライヴです。衝撃的です。シティターボです。ことし、最大のニュースです。
FF1.2ℓ
100馬力ハイパーターボ登場
HONDA
本田技研工業株式会社鈴鹿製作所

第8回日本リーグの話題を探る
ロス五輪へつながる熱闘を

NHK運動部　杉山　茂

8年目を迎える日本リーグ（前期）が、6月10日熱戦の幕をあける。

緒戦（東京）にいきなり男子の強力二チーム・大同特殊鋼×湧永製薬を激突させるなど、リーグ側の意気ごみの感じられる今シーズンだが、オリンピック前年、半年後には、そのアジア予選を控えるとあって、第一線に立つプレイヤーを網らする男子6、女子8チームの熱闘は、そのまま"ロサンゼルス"につながる道、内容豊かな試合がつづけばつづくほど、多ければ多いほど、オリンピックをわが手に手繰りよせる可能性が濃くなる、といってよい。

優勝、順位争いの興味や、リーグを取り巻く話題を探ってみよう。なお、本誌前号で、後期の日程が発表されているが、第3回男子アジア選手権（ソウル）と重なるため、9月以降のスケジュールは、すべてねりなおされることになり場合によっては、9、10月は女子だけ、男子後期は来年1、2月に延期されることもある、と伝えられる。

・男子の話題

今年のペナントレース（2回総当り）が面白くなるか、盛りあがらぬままに終わるかは、緒戦の大同特殊鋼×湧永製薬戦以後に、他チームが、この両強豪を向うに廻して、どのような試合ぶりを見せるかの一点にかかる。

開幕での"両横綱"対決は、日本リーグの印象づけにはこれ以上ない思い切った策だが、総当り戦の妙味は、強力チームが、待ち伏せる難敵を切り抜けながら連勝し、終盤へタイトル争いを持ちこむところにある。

大同が、湧永のいずれかが、スタートが負った傷を日新製鋼なり、本田技研鈴鹿なりが、容しゃなく狙って、深傷（ふかで）にできるなら、球趣は、いちだんと高まる。

逆に、一敗の大同なり、湧永なりが、取りこぼしを許されぬ緊迫によって、いっそう戦力を引き締めて出てこようものなら、後期まで〈天王山〉は望めぬだけに、エキサイトの度合が、かなり低くなってしまう。

当然のことながら、大同×湧永戦の勝者に、独走を許してしまっては、味気なさは、いっそうつのる。

大同、湧永という軸に変わりはないが、日程編成の妙から、他チームにも、〈初優勝〉のチャンスが芽生えたことが、今シーズンの大きな特色であり、期待ということができよう。

6連勝を狙う大同は、日体大の高村を迎えて、中央守備網の超大型化に成功した。

蒲生(192㎝)、田口(187㎝)、高村(188㎝)、中本（184㎝）の壁は、史上最高で、GK上村の成長を考えると、前季一位の失点数を、さらに強力化させることができる。

攻撃面では、さすがの蒲生に破壊力のダウンが感じられるが、その分、巧味を増しており、むしろ若い田口、高村、田中あたりを活かすという点では、新しい成果があがってきている。

大原、柳川弟のテクニックも相変らずのものがあり、上位との対戦では、やはり蒲生を加えたこのトリオの活躍に頼ることになる。

木野氏から津川氏へ監督のバトンが渡された湧永も、新人は中大の左腕・中川だけ、陣容は去年のままと考えていい。

山本、池ノ上、志賀、生駒、GK井藤と全日本代表をズラリと揃えた布陣は豪華この上ない。

特に、昨シーズン後期からみせた生駒の進境は、リーグの新しい看板ともいえ、池ノ上との左右コンビが、存分に力を発揮すれば、怖いものなし、の存在になろう。

穂積、松本の両ベテラン、新進・原田は、要所での働き手として欠かせぬ存在であり、層の厚さは大同をしのぐ、といい切ってよい。

前回初めてAクラス入りした日新は、ホープ・西山に欲が出てきたようなのが、たのもしい。

デビューした去年は、各チームの徹底マークに会い、非凡な腕前も散発的、日本リーグの雰囲気になれ、社会人のプレーを知った今季は、確実に、前回を上廻るパワーを発揮全日本の新しきエースへのステップを踏み出すことになるのではあるまいか。

この大器の加入で、チーム全体に自信と活気がみなぎっているのもいい。

脇若（コーチ兼任）、泉、洞ケ瀬の早大トリオを攻守の要に、藤井高木の安定は、確実に大同、湧永との差を詰めているし、故障がちの吉見も今季は期待できそうだ。

前回は、ついに入れ替え戦出場にまで落ちこんでしまった本田。

全日本総合で、湧永をあと一歩まで追いこんだ戦いぶりなどを見せつけられると、いぜん、このチームの"本当の力"が、いったい、どこにあるのが、首をかしげさせられてしまう。

いつまでも、ダークホースといわれることに甘んじてはいけないし、〈ホンダ時代〉突入ぐらいの気構えを持ってもおかしくはない戦力なのだ。

上向きの象徴は佐々木の闘志。彼のリードによって三本松が地力をのぞかせはじめたし、尾上、玉井、坂本、猪野らの攻撃も、かな

り安定してきた。

新人・立木（名城大）のセンスも買え、ことオフェンスでは、マイナス材料は一つもない。

カギはGK大畑に頼りすぎのディフェンス。

佐藤監督は、昨シーズン終了後「一から鍛えなおし」といっていたが、その努力が実れば3位カムバックはもとより、十分、優勝争いに加われる。

Aクラス入りを狙う大崎電気は山本（大阪体大）、GK矢内（国士舘大）と、学生界の代表的選手を迎える好補強に成功した。

山本は斉藤、長野、松岡、八幡につぐ五人目のレフトハンダー。

シーズン毎に評価をあげているテクニシャン東江の闘志と技をからませたこの攻撃陣はユニークで、上位陣も油断できまい。

矢内は、将来、全日本のゴールを守ることが折り紙つきの逸材。5月の全日本代表発表（第一次）で惜しくももれ、この惜しさを各試合にぶつけるようだと、ますます大崎は無視できぬ存在にのし上ってくる。

2シーズンぶりに1部復帰の三陽商会は、関、山口、坪子、金子らが健在だが、健闘のカギは、むしろ亀井（大阪体大）、伊藤（近大）の両新人や田口、砂川、望月、GK大山ら新鋭のプレーにかかる。

2部ぐらしの苦しさは、都会チームに、しっかり一本の筋を植えつけたようで、一暴れが期待できる。

・女子の話題

5年つづけて8チームによる1回総当り。

第2回、第3回に採用した2回総当り制の復活は、今年も、あっさり見送られた。

日本リーグ1部年次順位

【男　子】	I	II	III	IV	V	VI	VII
大同特殊鋼	①	②	①	①	①	①	①
湧永製薬	②	①	②	②	②	②	②
日新製鋼	⑦	⑦	④	④	④	⑤	③
大崎電気	④	⑥	⑦	…	…	…	④
本田技研鈴鹿	③	③	③	③	③	③	⑤
大阪イーグルス	⑥	⑤	⑤	⑤	⑤	④	⑥
三陽商会	⑧	…	⑥	⑥	⑥	⑥	…
三　景	⑤	④	⑧	…	…	…	…
三菱レ大竹	…	⑧	…	…	…	…	…
【女　子】							
立石電機	①	②	④	⑤	①	①	①
大崎電気	⑦	⑥	⑤	⑥	⑥	③	②
ジャスコ	⑤	④	②	①	③	②	③
ブラザー工業	④	③	③	③	②	④	④
日本ビクター	②	①	①	②	⑤	⑥	⑤
日立栃木	⑥	⑤	⑥	④	⑤	⑥	⑤
大和銀行	…	⑧	…	⑧	…	…	⑦
北国銀行	…	…	⑦	⑦	⑦	⑦	⑧
東京重機	③	⑦	…	…	⑧	…	…
ムネカタ	⑧	…	⑧	…	…	⑧	…

アジアで三位が〃指定席〃になってしまった日本女子界は、全日本実業団や全日本総合選手権など廃めてしまって、日本リーグの厚味を増すことや、ジュニア大会の実施を考えたらよいのだが、そんな話は、関係者の間ではなかなか交しにくいらしい。

2チーム（東京重機ムネカタ）だけの2部も、1部に吸収して、新しいシステムを考えたらと思うのだが、積極的な姿勢はないようである。

日本協会や日本リーグ運営者はもう少し「日本リーグ」というものの存在を認識して、最善の道をつねに探っているようにしないとペナントレースを惰性的に続開しているにすぎなくなる。

こうした動きを別にして、リーグが賑いをみせているのは、一昨年の大崎電気の李コンビ加入、昨年の立石電機のユーゴペア補強に負うところが大きい。

李相玉、李京姫、イレシュ（ドルベニヤクは負傷がちだが……）の示した攻守、心技体は、明きらかに日本ハンドボール界へ新しい風を吹きこみ、ファンの足を会場へ誘った。

この4選手は、今シーズンも引きつづき、リーグの看板であり、彼女たちのプレーをのみこんだ〃日本チーム〃〃日本選手〃の対抗ぶりが、新たな興味として浮かびあがって来よう。

男子とちがって、前期はどちらかといえば有力チームにとってはトライアル、タイトルのかかった星のつぶし合いは、後期に組みこまれている。

反面、前期でつまづくと、そのままBクラス落ちにつながってしまう危険がのぞくわけで、惑星群のチーム力が、とりあえずのポイントといえる。

各監督に聞いた見通しを総合すると頂点は立石と大崎、これを追ってブラザー工業、ちょっと遅れてジャスコ、日本ビクター、日立栃木、やや下って北国銀行、大和銀行となる。

大和は、秋成、若水と全日本ジュニアの主軸が、いっそう場なれして、ホームクラブでも中心の存在になった。

若杉、鈴木の力は安定しているし、川添も迫力を増した。

去年までは〃一発〃を狙ってという試合ぶりだったが、今年は秘かに勝ち越しを狙っているようでそれを果たすには、日立あたりを食いたいところだ。

北国は、オールラウンドプレイヤーを目指す左腕・八木に、いぜん、すべてがかかる。

155㎝の小柄ながら、抜群の切れ味を誇る八木のプレーは、鮮やかなものがあるが、いつまでもそれだけでは、順位も、勝ち点もあがらない。

竹、藤田、中田、新人・和田（小松市女）といったメンバーを、酒谷監督（コーチから昇格）が、どう使いこなすかも注目される。

日立は、ここ三シーズン4位、5位、6位と下降カーブを描いてしまい、今シーズンは正念場だ。

調子が出かかると負傷者が出てしまう不運に、伊藤監督も、いちちはかなり神経質だったが、どうやら大高、手打を配球源、ゲームメーカーに仕立て、力を伸ばしてきた西山、藤田、実績のある前田らで浮上の見通しをつかんだようなのはいい。

へき頭のブラザー戦をとれれば波にのることができそうだ。

ビクターも4年ぶりのAクラス復活に躍起である。

7人のルーキーを加え、練習にも久々に気合いが入り、なかでも水海道二高から迎えた169㎝の下條に注目が集まる。

速攻得意の池田監督も、武藤、志村に下條という強打陣には期するものがあるようで、村上、長田中根らの巧者と合わせて、これまでとちがったカラーを打ち出そう。

ホームコートでの開幕戦がジャスコというのも、巻き返しを狙うビクターにとっては好都合。もろ

いとされるディフェンスをGK渡辺が盛り立てれば、波乱のオープニングも不可能ではない。
　男子の本田と同じように、強いといわれながら、期待を裏切りつづけているブラザーは、今年こそタイトルに手を掛けたい。
　巧者・増永、強打・杏原とタイプの違う二枝のリード役を中心に竹内、塩谷、中村、GK畑添らのライン・アップは、白神監督も「優勝を狙える力はあると思う」というほどだ。
　毎シーズン、肝心なところで星を落とす不安定が、どこまで解消されているか、また、どの局面で調子の波に乗れるかが、このチームほど重要な意味をもつところもあるまい。
　ジャスコは、メンバーが〃一新〃された。
　技の横山、パワーの辻木、速さの重村といわれた個性豊かな攻撃トリオが抜け、松岡、寺沢、GK矢部を中心に石田、鷲野らで頑張ることになる。
　キャリアがモノをいう女子界だけに、この〃若さ〃は気になるがいったんリズムをつかめば、一気に突走る期待もかかる。
　新人・近藤（市邨学園高）あたりが活躍してムードを盛りあげると、地力は十分だけに3位内キープも不可能ではない。
　優勝最有力といわれる立石と大崎は、ともに自信満々だ。
　大崎は、得点源・李京姫のヒザの故障が完治せず、前期はムリをさせないのでは、という情報もあるが、李相玉、西に引っぱられて徳渕、石井が充実、新鋭時実、渡部も確実味を増してきた。
　地味ながら巧いサイドプレイヤーだった陽田の退いた穴は、どうやら大日でメドがついたようだしGK梅野の元気も、守りを締めている。
　李相玉の好配球からくりひろげられる独得のセットオフェンスに加えて、今季は「速攻にもみがきをかけた」（谷口監督）のは、明きらかに立石の守りを意識してのものだ。
　追われる立ち場の立石は、エース木下、姫野が退陣、痛手をうけているが、イレシュがそびえ立っているほか薮田の奮起、岩村の安定、江口の成長、是枝の進境などで、V4への地固めは十分ととのっている、とみてよい。
　安りの強さはもともと定評があるうえDKも井村、荒木と他チームが羨やむ二枚を持つ。
　初めて試みたヨーロッパ遠征（4月）では、大型といわれる野嶋（松橋高）、山内（牧園高）の新人コンビも積極的に起用、自信をつけさすなど井監督のベンチワークは、相変らず光る。
　層の厚さ、大黒柱イレシュの存在を考えると、昨年以上の突進でタイトルを保持しそうな気がする。



・2部・記録の話題

　2部は男子が初の8チーム1回総当り、女子が2チームの2回戦対抗。
　男子は1部から大阪イーグルスが落ち、トヨタ自動車、本田技研熊本が新加入、本田に敗れたセントラル自動車が姿を消す、という異動があった。
　トヨタは、一昨年の高校1位、下松工の若手OBに小山（早大）が加った新進、本田はベテラン田上（法大―本田技研鈴鹿）が率いている。
　両チームとも侮れぬ力を持っているようだが、上位を狙うとなれば、率直にいって、まだ時間が要りそうである。
　優勝争いは、イーグルス、三景中村荷役運輸の三チームにしぼられそうで、日鉄建材、大阪ガス、トヨタ車体は、ややパワーに欠ける。
　女子は東京重機とムネカタのさびしい対決。
　勝敗の行方より〃逆境〃にめげず活動をつづけるその姿勢に、拍手を送るばかりだ。
　リーグの一つの興味に定着してきた〈記録争い〉には、四つの焦点がある。
　一つは、第一戦（51年9月）以来、実に70試合すべてに得点という山本（湧永）の快記録が、今季もピリオドを打つことなくつづくか、どうか。
　6年連続最優秀シュート率をあげた松本（湧永）が、さらにこのタイトルを持ちつづけるか。
　通算527ゴールをはじめ十三ものリーグ記録を持つ蒲生（大同）が、自からの数字を、どこまで更新するか。
　一昨年のジャスコ戦以来連勝の立石電機が、いつまで無傷で突走るか――である。
　なお、設立以来、日本リーグは前回までに41都道府県で開催されているが、今季は群馬、岡山、奈良で初めて行われ、いちども立ち寄っていないのは3県に減った。

関東ジュニアハンドボール研修訪独旅行を終えて

計り知れない収穫

本場の技術、ホームスティでの心の交流





3月下旬から約2週間の関東ジュニアボール研修訪独旅行に参加した一行は、憧れの本場での試合で全力を出して戦って帰国した。短い期間だったが、その技術的な収穫ははかり知れないほど大きく、また、ホームスティで、西独の人々の暖い心に触れ、ハンドボールを通しての心の交流は一行の胸に大きな感動を残したものだった。研修訪独の監督、選手たちの感想をご紹介しよう。

よく戦った選手たちに敬意

男子チーム監督　小西正寿
（栃木県立小山城南高）

3月22日火曜日、新東京国際空港に全員が顔をそろえ、不安と期待のもと4月4日までの研修旅行が始まった。幸運にも弱輩者である私が男子監督という大役をお引き受けし、責任の重さを身にしみての出発であった。合同練習は、わずか2日、また、生活様式が全く異なる地での試合、何をとっても不安だけという状態であった。しかし役員、選手一同、ハンドボールのメッカである西ドイツで、本場のハンドボールを体験できるという期待のもと成田を出発、3月23日、西ドイツに無事到着、西ドイツでの生活が始まった。

翌24日より、第1試合の開始、相手チームの情報はもちろん、自分たちのチームの状態も知らないというなか、9日間で6試合という強行スケジュールをこなしてきた。この6試合の内容について、生徒の感想を記載したいと思う。

第1試合

初戦ということで立ち上がり堅さがみられたが、すぐに相手チームのプレーに慣れ試合が展開できた。しかし、練習不足のためミスがめだつ前半であった。後半に入り立ち上がり3点連取し、このままのペースで行くかに思われたが、中盤になりミスがめだちだすが、相手のまずい攻めに助けられ、残り時間6分までは4点差を保つ。しかし、相手チームのNo.7のロングがきまりだし残り1分で同点に追いつかれる。最後の攻撃権を得て、No.8（飯島）のポストシュートがきまりタイムアップ、からくも1点差で勝利を得る。

相手チームは、テクニックはまだまだであるが、シュートスピードのすごさには目をみはらせられた。日本人とのパワーの差を痛感する。とにかく、男女とも第1戦を勝つことができたことは嬉しいことである。

第2試合

第1戦の相手チームより上位にランクされるチームであるだけに、パワー・スピードとも目を見張るものがあった。

前半8分過ぎまで、無得点、全くと言っていいほど攻撃・防御とも

に精彩がなく、大量得点を許してしまう。後半に入り追い上げに入るが、前半の点差が響いてしまう。前半2点でも1点でも得点し、失点を少なくしていれば、後半の戦いぶりでは、これほど点差の開いたゲームとならないと思えた。

相手チームは、No.13のワンマンチームといった感があるが、ポストとのコンビプレーもよくとれていた。

2試合目となり徐々に1人1人のプレーを皆が理解できてた、今後の試合展開を明るいものとなるだろう。今日は疲れが最高頂だったのか、後半の半ばを過ぎ足が止まってしまう。

第3試合

ホストクラブであるベットベルゲンとの対戦で、相手に対する不安はなく、またこの試合への意気込みが全員に感じられた。そして昨日は、試合がなかったため疲れがとれ体調も良くベストコンディションで試合に臨むことができた。

対戦チームは今までのチーム以上に高さのあるチームで、身長2メートル以上の選手もいた。

前半は、点数的にはシーソーゲームであったが両チームともミスが多く凡戦であった。後半に入り、防御を1－5にしたのが効を上げ逆転に成功する。一方、TVSベットベルゲンは、逆転されたことであせりが出てシュートがあまくなり、得点をあげることができなくなる。また、ゴールキーパーの好守で、相手チームのノーマークシュートを阻止し、試合に勝つことができた。

TVSベットベルゲンも今まで同様、強引なプレーをしてくるチームであった。また、背が高いためリーチも長く、思いがけないところでパスカットをされるなどまざまざと形態の違いを痛感させられた。

第4試合

試合開始早々、3点連取され、立ち上がりの悪さを見せた。しかも、こちらのミスを速攻されての得点である。セット攻撃では、MTVヘレンハウゼンはポストプレーがよく、体が大きく動きがシャープなポストプレーヤーであったため、ポストに入ったパスはほとんど得点されてしまった。前半3点差をつけ、後半余裕のある試合運びとなるかと思われたが、ミスは少なくなったがゲームのポイントとなるところで得点できず相変らず苦しい戦いであった。しかし、後半は、ポストプレーに対する守りを、プレーヤーを守るのではなく、ポストへのパスをカットする守りとしたため、ポストプレーをおさえることができた。このことは、今後のゲームに生きてこよう。

徐々にではあるが、試合を重ねるたびにチームとしてのまとまりができてきたように思う。しかし、まだまだコンビは不十分でミスが出る。皆多少疲れぎみの様で足が止まってしまう場面が再三見られた。

第5試合

MTVヘレンハウゼンのポストプレーは、日本との違いをまざまざと見せつけられた。

結果的には勝ったのもの試合内容では反省するべき事ばかりであった。第2、3、4戦とベズリクスリーグ（地区リーグ）のチームとの対戦で自信を得たのか、一ランク下のクライスリーグのチームということで、皆知らず知らずのうちに気を抜いていたのかもしれない。そのためか、前半はミスだらけ、それも基本的プレーであるパス、キャッチのミスばかりであった。また、防御においても、つめ遅れからステップシュートやスタンディングシュートで相当得点を許した。

今日の試合は、勝負では勝ったが内容では負けたものであった。西ドイツでの試合も明日のVfLハメルン戦を残すばかりである。西ドイツのプレーになれ何か気のゆるみもでてきているように思える。また新に気持ちを引きしめて、明日の試合に望む必要があるように感じた。

第6試合

今日対戦するVfLハメルンは、ベズリクスリーグで今季1位となり来季よりファーストオーバーリーグ（州リーグ）への昇格のきまったチームである。今までのチームにない強さを身にしみて感じさせられた。たとえば、パワーという点ではかわりはないが、攻撃におけるコンビプレー、ブロックプレーをうまく利用してのポストプレーや中央にディフェンスを寄せ早いパスでのサイドへの展開、フローターから逆サイドへの展開等、すばらしいものであった。また、前半は、センタースリーにおける45度プレーヤーの力強い1対1のプレーを中心に攻撃が展開されるが、後半に入ると、サイドプレーヤの攻撃が中心となるなど、チーム戦術も今までのチームにないものであった。

防御も、よく足が動いており、あまいシュートやミスプレーは、すぐに速攻につながれた。しかし、防御は日本のように前へつめるのではなく、間を割られないような守りが中心であった。

私たちも最終戦でかつ対戦チームのなかで最も強いチームという

こともあり、精神的にも充実し試合に臨み、継ぎの速攻を中心とする攻撃で対抗する。しかし、立ち上がり5分過ぎまで、浮き足だったのか4点差をつけられるがなんとかふんばり前半を2点差で折り返す。

後半に入り、一度は逆転に成功するが、その後は一進一退の攻防をくりひろげる。残り時間3分で1点リードするが、相手もここぞという場面では確実に得点をあげ、ふたたび1点リードされる。ここで勝負をあせり、逆に相手のリードを広げられゲームセット。

今日の試合は、敗れはしたものの西ドイツ遠征のしめくくりとしては、納得のいくゲームであった。ひとりひとりが皆で戦ったという気持ちが持て、くやしい試合だったが壮快であった。

計り知れない収穫

以上のように6試合を行ってきたが、試合を重ねるたびに選手個々の力またチームとしての力も確実に向上してきたように思う。そして、これらの試合の経験が、帰国後十分に生かしきることができることと思う。

なにはともあれ、10人の選手で、十分な練習をつまず、よくここまで戦ったものと思い選手の諸君に敬意を表わしたい。そして、この経験を自分たちのものとせず日本のハンドボール界に貢献してもらいたいと思う。

さて、西ドイツ遠征で最も印象に残ったものは、生徒同様やはりホームスティにおける各家庭での生活だった。私がホームスティをした Freitag 家では、両親の Heinz 氏、Elke 夫人、そして娘の Claudia と家族同様の世話を受け、心から感謝している。空港での別れの時は、胸から熱いものがこみあげてくるのを感じた。そして "Seeyouagain" と繰り返し必ずの再会を約束した。ホームスティにより、私たちは、多少ではあるがドイツ人の生活や考え方にふれることができたように思える。

ハンドボールということに関しては、ひとことで言い表わすならば、西ドイツのすごさを感じとった。西ドイツのハンドボール界のごく一部を垣間見たにすぎないが、ハンドボールへの関心度、技術的にも戦術的にも奥深い広がりを感じられた。そして、日本においてもこのような広がりができたならばと思わずにはいられなかった。

最高の思い出対ベ戦の勝利

駒大高校1年　竹　下　　誠

4月4日、17時20分、成田空港に到着しました。

行きの飛行機の中、これから2週間も日本を離れてしまうのかという不安と、これからどんなことが待ちうけているのかという、大きな期待とが入り混じった複雑な心境でいましたが、時が過ぎるのは早いもので、あっという間に2週間が過ぎ去ってしまいました。今、ふと目を閉じると西ドイツでの思い出が次から次へと頭に浮かび、まるで昨日のことのように思えます。それらは私にとって生涯忘れることのない貴重な体験となるでしょう。

そうして、試合を振り返るといろいろなことが思い出されます。悔いの残った試合、全力を尽くせた試合、その中でも一番思い出深いのは、やはり対ベットベルゲンの試合です。

「あの205 cmのロングシュートは絶対に捕れない。あの196 cmのキーパーはどんなシュートでも捕ってしまう。絶対に勝てる訳がない。」初めて見た時には誰もがそう思いました。しかし、私達は絶対に勝ちたかった。その気持がよくプレーに出ました。多少のミスもありましたが、みんなで盛り上げ、みんなでシュートを入れ、みんなでシュートを止め、みんなで攻め、みんなで守り、絶対に勝てないと思っていたベットベルゲンに勝ったことは言葉では表現できない程うれしかった。が、その試合の終了間際、私は足首をねんざしました。今思うとたいへん悔やしいです。私がねんざしなければ、その後の試合がもっと楽に出来、ハメルンにも敗けなかったかも知れません。しかし、そのことはもう後悔しません。

西ドイツにいる間、ホームスティしてお世話になったおじさん、おばさん、息子のトイステン、彼らはとても親切にしてくれ、細かい所まで気付かってくださいました。

食事が合わないと思うと、おばさんが一生懸命、御飯や中華料理を作ってくださいました。おじさんは仕事を休んでまで、私達に付き合ってくれ、町にも案内してくださいました。彼らの親切心には心を打たれ、涙がこみあげることもしばしばありました。

しかし、私の語学力では意志が通じなく、自分の勉強不足を改めて痛感し、やるせない気持ちになりました。それでも、おじさんやおばさんが慣れない英語を一生懸命使ってくださって、私も少しづつ英単語を並べただけに近い英文ではありましたが、話すことができるようになり、彼らの考えも、私の考えも、お互いに通じ合うようになりました。

また、ベットベルゲンの人達もたいへん親切にしてくださいました。

私達の観光に同行していただいたり、めんどうなことでも少しも嫌がらずにしてくださって、試合の応援までしてくださいました。彼らは私達の行動すべてに気付かってくださいました。

私のねんざをみんなで心配してくださって、激励してくださいました。これらすべての感謝の意をダンケシェンを何度繰り返して言っても、まだまだ物足りない気がしました。

お別れの日、スポーツパークへ見送りに来てくださった人達に固く握手をしました。チームメイトには涙を見せる人もいましたが、私は涙を見せれば別れがもっとつらくなると思い、じっと我慢してバスの窓から手を振り続けました。しかし、そのうちに、我慢も限界にきて、自然と涙が流れだしてしまいました。それを見たベットベルゲンの人達は励ましてくれました。そして私は彼らとまたかならずベットベルゲンを訪れることを約束しました。

空港での別れはもっともっとつらかったです。おじさんやトイス

テンと目が合ったとたん涙を流さずにはいられませんでした。そしてベットベルゲンの親切な人達を見ていると、このままずっとここにいたいと思う程でした。そして、涙が止まった時、私は再び、かならずここを訪れることを固く心に誓いました。

その後、ロンドンやパリを訪れました。ロンドン塔、ルーブル美術館、モンマルトルの丘、エッフエル塔、素晴らしいものはたくさんありましたが、西ドイツいやベットベルゲンの素晴らしさにかなうものは何もありませんでした。

今回の西独遠征に参加でき、顧問の田中先生にたいへん感謝し、そしてそれと同時に団長の三浦先生を初めとする諸先生方の努力に深く感謝しております。また、参加を許してくれた両親にも感謝したいです。

遠征中、大きな失敗もありましたが、この遠征で得たことすべてを私のこれからの人間性の向上と共に、ハンドボールの技術向上に役立つよう努力し、全力を尽くして頑張りたいです。

そして、これからの関東のハンドボール及び日本のハンドボールがより一層繁栄することを願っております。

生かしたい貴重で大きな経験

浦和市立高校　2年　森　永　省　一（FP）

まず、試合で感じたことは、高さとパワーがすごいということだった。

長身を生かしたロングやミドルは、DFのつめが甘いと、確実に点に結びつけていた。

また、ステップシュートもDFのすきをついては狙ってきていた。

ポストプレーも最終戦ではブロックプレーを使っていたものの、それまでの試合では、強引にポストに入れてくるケースが多く、ポストもパスを受ければ強引に打ってきた。

ロング、ポストとともに、マンツーマンで強引に割ってくるプレーも多用していたが、速攻はあまり多くは使われていなかったように思われる。

DFについても、高さを利用していて、正直に打っていったのでは止められてしまっていた。

二次速攻や、スピードをつけた攻撃などがききめがあった。高さ、パワーとともに、スピードの必要性、フットワークの重要さを痛感した。また6試合を通して、技術的なものだけではなく精神的なものの重要さも改めて感じた。

この遠征で、ハンドボール技術の収得だけでなく、ホームスティなど多くのことを体験したことは、これからの生活の中でおおいに役に立つことだと思う。

1人でホームスティをすると知った時は、不安でどうして良いかわからず、最初に家に行った時など、次から次へと話しかけられ、自分では、わかっているつもりなのに、あせってしまって、自分の言いたいことが言えなくなったり、何を聞かれているのかわからなくなってしまったりして、無言の状態が続いたりもした。

しかし、2、3日もして、慣れてくると、だいたいのことは通じるようになり、楽しくなってきた。

家族の人はとても親切に接してくれ、ドライブやショッピングなどにもつれていってくれた。

試合から帰って、その日の試合や観光したことなどひとつひとつ苦労しながら証明したのも忘れられない思い出のひとつだ。短い期間だったけど、楽しかっただけに、別れが本当につらかった。

しかし、別れたとしても、友達であるし、お世話になったことや楽しかったこと、素晴しい西ドイツの自然や、美しい街並などは忘れることができないと思う。

この遠征で見てきたこと、感じてきたなどは、自分のこれからの生活にとって大きな経験として、生きてくると思うし、西ドイツと関東各地に友達ができたことは、大変貴重なことだと思う。

『西ドイツ遠征雑感』

女子チーム監督　原　信　雄（藤村女子高等学校）

ホームスティの素晴らしさ

出発前は、何かと不安だった「ホームスティ」……。ドイツ人の家庭にお世話になる……。言葉は？　食事は？　生活様式は？　特に女子高校生の場合は？　等々心配だらけだった。今思えば本当に恥しい、取り越し苦労だったようだ。

私達は身にあまる歓迎を受け、大事にされ、暖かくもてなされた。ドイツ人気質なるものを多少なりとも予備知識として理解していたつもりだったが、予想をはるかに上まわるものであった。本当に親身になってお世話して頂き感謝し感激している。ベットベルゲンのスポーツパークでのお別れの際、更に空港のお見送りの時、ホームスティの家族の人達と選手が抱き合って泣いていた姿を想い出す。ある母親が日本の選手を抱きかかえながら『大事な娘をとられる思いだ』と。私はそんな情景を見ながらもらい泣きしてしまった。なんとすばらしい美しい姿だろう。ホテル等に泊っていたらとうてい味うことが出来なかったであろう貴重な体験をさせてもらった。うわべだけの絵に描いたようなものでなく、本当のドイツ人と日本人の生きた、木物の心の触れ合を感じた思いであった。

ハンドボールの本場西ドイツは、まさにその名にふさわしいところだと思った。私達が訪れたどの町にも立派な体育館があり、ハンドボール競技が出来るものであった。どの試合にも大勢の観客が詰めかけ熱気ある応援ぶりである。ラッパを吹き、太鼓を叩き、口笛を鳴らし、あげくの果ては足踏みして床を鳴らして声援する。敵味方なくナイスプレーには惜しみない拍手を送る。観戦するというよりは自らが楽しみ、自らがエキサイトして競技しているような感じがする。試合の合間等に子供達が出てきてハンドボールを楽し

んでいる姿は、ほほえましく思うと同時にハンドボール人口の底辺の広さをつくづく感じさせられた。

試合は6試合行った。女子チームの成績は5勝1敗で上出来だったと言えよう。出発前には1勝でも出来ればと思っていたのだから。最終戦の相手チーム、ハメルンは後で聞いたところによると、西ドイツでベスト4位にランクされる強豪で、ナショナルプレーヤーが4名も出場していたとの事で驚いた。2点差で負けたものの、内容的に充実した試合だったと思う。

私達が対戦した西ドイツ少女チームの特色を気の付くままに記したいと思う。

一、速攻（スピード）はあまりない。
一、体格は優れていた。
一、ディフェンス、特にFPとGKとのコンビのよさが目についた。
一、スタミナ、パワーがある。
一、個人技、特にフェイント力が優れている。
一、シュートの確実性、ねばり強さがある。

みんなが楽しんでいる

西ドイツのハンドボールチームは、日本の学校中心のクラブ活動に対し、地域社会におけるクラブ組織で活動がなされている。そして、年齢、能力（技術レベル）により、各層様々なチームがあり、それぞれ独自の方針に基づいて運営されているようである。これはハンドボールだけでなく西ドイツのスポーツ界に全てあてはまる、日本とは異る特徴であろう。

更に日本のハンドボールは、あまりにも勝敗にこだわりすぎるという感じがした。西ドイツのハンドボールを見ていて、幼い頃よりハンドボールに親しみ、ハンドボールを楽しんでいるという感じがした。友達と、あるいは家族と一緒にハンドボールを行う。ハンドボールというスポーツを通して幅広い人間関係がなされているように思える。西ドイツのハンドボールは誰にでも出来る気軽なスポーツなのである。（日本の野球、バレーボール、テニスといったところだろう）。

誰れもがハンドボールをよく知っている。ルールも技術も皆んなが知っている。まさに国民的スポーツなのである。だから頂点に位置するチームはおのずと強くなるのであろう。やはりハンドボールの木場西ドイツなのである。

本場の技術、人々の親切に感激

藤村女子高校　南出　有実子

待ちに待った西独関東ジュニアハンドボール研修旅行が、3月22日成田空港を出発して始まりました。

翌23日、不安と期待の交差する中でハノーバーに着きました。スポーツパークでは、TUSベットベルゲンの人々の出迎えで異国に対する不安がいくらか安らぎました。と同時に試合に勝てるのかという新たな疑問がわいて来ました。西独のハンドボールのレベルは、高いと聞いていますが、ベストを尽して頑張って見ようと思いました。

しかし、ホームスティではどんな家庭に入るのか、また不安がよぎりました。私のお世話になる家はミスター・オピッツ、同じ年頃の娘さんがいました。同じ学生なのでなんとかやって行けそうな気がしました。

翌24日、10時から私達のチームの練習が始まりました。時差の影響で体が思うように動きませんでした。夕方6時から試合が始まり、5分経過後、手ごたえがなく、やたら私たちのシュートが決まり、そのとき、この試合は勝てるという確信を持ちました。試合は14対10、1試合目から勝てたことが夢のようです。

それから次々と勝ち続けて5勝、最後の試合は2点差で負けてしまいましたが、ドイツの中でもベスト4に入るチームで今までの中では最強チームでした。後で知ったことですが、彼女達は各町のクラブチームで日本の様に組織的に練習をしていないそうです。でも、このように自由に練習を行いハンドボールを楽しんでいる人々は、おおらかさがあるような気がしました。ジュニアは弱いけれども、各クラブの生え抜きがシニアに進むと聞き、日本より層が厚いと思いました。ホームスティでは言葉が分からないので何を言っていいのか困りました。

幸いに私は通訳の人と同宿でした。でも、だんだん日が過つにつれて身振り、手振り、知っている英単語でなんとか意志が通じるようになりました。ホームスティの家の人がスポーツパークへの送り迎えをしてくれることも大変なことだと思うと、感謝の気持ちでいっぱいでした。

本場のハンドボール技術を自分の目で見た感激は大きい。また、ハノーファーの人々の親切はとてもうれしく感じました。

今後の学生生活、人生経験において大きな役割りを果たすような気がします。



海外トピックス

西独、ロス五輪を逃す
～五輪ヨーロッパ予選～

ロサンゼルス・オリンピックスのヨーロッパ地域予選を兼ねた第4回世界男子選手権Bグループは、今春2月25日から3月6日までオランダに12カ国が参加して行われハンガリー(初優勝)、チェコ（2位）がオリンピック出場権を獲得本命視されていた西ドイツは得失点差争いの末、3位に終わり、ロサンゼルス行きを逃すという大波乱が起きた。

大会は、4カ国づつ3組の予選リーグのあと、ベストシックスによって決勝リーグが争われた。

予選を突破したのはハンガリー、スウェーデン、西ドイツ、チェコ、スペイン、スイス、この顔触れは、専門家筋の予想どおりだった。しかし、決勝リーグに進むと、にわかに乱戦模様となり、まず西ドイツがスイスに押しまくられ、辛うじて引き分け、ハンガリーもチェコの猛攻をささえ切れず完敗スウェーデン、スペインを除く4カ国に〝優勝〟のチャンスが残った。

このあと、スイスは、チェコ、ハンガリーに連敗、圏外に去ったが、名手エーシットを負傷で欠く西ドイツも、もう一つ歯切れがよくなく、スペインと18－18で引き分けた。

スペインは残り2分18－15とリード、勝利を握ったかにみえたが、必死の西ドイツは奇跡的な追撃に成功、やっとの思いで争覇戦に踏みとどまった。

これでチェコ、ハンガリー、西ドイツが勝ち点6となり、すべては最終日に持ちこされた。

チェコ×スペインは、9回同点のあとチェコが主導権を握り13－10と優位に立ったが、ここで逃げにまわったため、残り9分19－20と逆転を許した。このあとどうにかタイに持ちこみ引き分けとなり、勝ち点7でオリンピックへのパスポートを握った。

帰る一つの座をかけたハンガリー－西ドイツは、異様なムードのうちに試合が運ばれ、前半は5－5という重苦しい展開。

後半20分西ドイツは11－9とリードを奪い、6分後11－11と再び並ばれたものの29分52秒ブラントのシュートが決まって12－11、誰の目にも、勝利を確信づけた。

ところが、早々と歓喜のポーズをとる西ドイツ陣内にハンガリーのFPがあっという間になだれこみ、左サイドからケニエレスが史上に残る劇的な同点ショットを放りこみ12－12、そのまま終了のホイッスルを聞いて、ハンガリーの優勝とオリンピック行きが決まった。

西ドイツ陣営は、コーチングスタッフはもとより役員団までが本部席を取り囲み、ケニエレスのシュートは、すでに試合時間を過ぎていた、と抗議したが、受けつけられなかった。

ハンガリーの執念をみせつける、興奮のフィナーレだったが、王国西ドイツの敗退は、それに上まわるショッキングなできごとといえる。

なお、女子のオリンピック・ヨーロッパ予選は、今秋11月ポーランドで行われる。

▽予選リーグA組
スウェーデン 27－16 ブルガリア
ハンガリー 28－13 イスラエル
スウェーデン 28－21 イスラエル
ハンガリー 25－15 ブルガリア
イスラエル 24－23 ブルガリア
ハンガリー 26（10－8、16－11）19 スウェーデン

▽同B組
チェコ 24－8 オランダ
西ドイツ 22－18 フランス
西ドイツ 19－10 オランダ
チェコ 25－21 フランス
フランス 19－19 オランダ
西ドイツ 17（11－8、6－8）16 チェコ

▽同C組
スペイン 23－16 アイスランド
スイス 26－19 ベルギー
アイスランド 19－15 スイス
スペイン 20－5 ベルギー
アイスランド 23－20 ベルギー
スイス 23（13－12、10－10）22 スペイン

▽7～12位決定リーグ
オランダ 16－9 イスラエル
アイスランド 26－24 ブルガリア
フランス 23－18 ベルギー
フランス 20－18 ブルガリア
ベルギー 23－22 オランダ
アイスランド 22－22 イスラエル
アイスランド 20－18 フランス
オランダ 22－21 ブルガリア
イスラエル 22－17 ベルギー
フランス 21－19 イスラエル
ブルガリア 28－21 ベルギー
アイスランド 23－17 オランダ
イスラエル×ブルガリア、フランス×オランダ、アイスランド×ベルギーは予選リーグの記録適用

【順位】⑦アイスランド4勝1分⑧フランス3勝1分1敗⑨オランダ2勝1分2敗⑩イスラエル2勝1分2敗⑪ブルガリア1勝4敗⑫ベルギー1勝4敗（9～12位はCグループに転落）

▽決勝リーグ
スウェーデン 26（13－10、13－9）19 スペイン
西ドイツ 16（9－8、7－8）16 スイス
チェコ 23（11－11、12－9）20 ハンガリー

得	【チェコ】		【ハンガリー】	得
0	ヒルネル	GK	ホフマン	0
0	バルダ	GK	パルタロス	0
0	リスカ	FP	スザボ	2
1	クラクトビル	FP	P・コバクス	6
2	コトルク	FP	ホルバース	1
4	ブレソトバンスキー	FP	ボドール	1
6	ホノルカ	FP	M・コバクス	1
1	スティカ	FP	レレ	5
3	バルテク	FP	デブレ	0
0	サエルニイ	FP	オリ	3
4	ヴィット	FP	ベフ	1
2	パピエルニク	FP	マロシ	0
23	(4)	PT	(2)	20

チェコ 25（16－4、9－10）14 スイス
ハンガリー 20（11－10、9－9）19 スペイン
西ドイツ 18（12－5、6－10）15 スウェーデン
西ドイツ 18（10－9、8－9）18 スペイン
ハンガリー 28（15－6、13－8）14 スイス
チェコ 26（14－14、12－10）24 スウェーデン
スウェーデン 23（13－5、10－5）10 スイス
チェコ 20（7－9、13－11）20 スペイン
ハンガリー 12（7－7、5－5）12 西ドイツ
ハンガリー×スウェーデン、西

ドイツ×チェコ、スイス×スペインは予選リーグの記録を適用。

【順位】①ハンガリー3勝1分1敗（得失点差19）②チェコ3勝1分1敗(15)〜以上オリンピック出場権獲得〜③西ドイツ3勝1分1敗(4)④スウェーデン2勝3敗⑤スイス1勝1分3敗⑥スペイン2分3敗。

【個人得点ベスト10】①ベルホフスタット(ベルギー)46②ヴンダーリッヒ(西ドイツ)45③P・コバクス(ハンガリー)44④アラソン（アイスランド)34⑤バルテク（チェコ)、セリネ（フランス)、ヨシポビッツ(イスラエル)、タルカラノフ（ブルガリア）31⑨ウリア（スペイン）30⑩J・ムニョス（スペイン）、スヨルグレン（スウェーデン)28。

グンメルスバッハなど勝つ
〜ヨーロッパ・カップ〜

昨年秋から約7カ月にわたりヨーロッパ各地を熱狂させていたヨーロッパ・カップ三大会が、このほど全日程を終了、栄光のチャンピオンチームが決まった。

三大会とは、伝統のヨーロッパカップ、カップ・オブ・カップス（ウイナーズ・カップ）、IHFカップの各トーナメントで、いずれもヨーロッパ各国の代表的クラブチームが出場する。

なかでもヨーロッパ・カップは各国のチャンピオン（全国リーグ勝者）が集い、世界最強のクラブを決める大会として声価が高い。

カップ・オブ・カップスは、各国が全国リーグとは別に、勝ち抜き戦を行ない、その勝者によって争うもので、一本勝負に強い異色の有力チームが戦うため波乱が多く、人気を集めている。

IHFカップは、昨年から始められたもので、各国の3〜4番手のクラブのための大会。強打を誇るエースのワンマンチームなど個人技の多彩さが魅力という。

今シーズン特筆されるのは、ソ連勢が5大会の決勝へ進出、四つのタイトルを握ったことだろう。

◇第23回男子ヨーロッパ・カップ決勝

VfL・グンメルスバッハ（西独）19（13—8、6—7）15 チェスカ・モスクワ（ソ連）

チェスカ・モスクワ 14（7—4、7—9）13 VfL・グンメルスバッハ

1勝1敗、32—29でVfL・グンメルスバッハの優勝

◇第8回男子カップ・オブ・カップス決勝

スカ・ミンスク（ソ連）34（14—10、20—12）22 ディナモ・ブカレスト（ルーマニア）

ディナモ・ブカレスト 26（13—13、13—11）24 スカ・ミンスク

1勝1敗 58—48でスカ・ミンスクの優勝

◇第2回男子IHFカップ決勝

スル・サポロシェ（ソ連）22（12—14、10—6）20 IFK・カールスクローナ（スウェーデン）

スル・サポロシェ 23（12—7、11—9）16 IFK・カールスクローナ

◇第22回女子ヨーロッパ・カップ決勝

スパルタク・キエフ（ソ連）23（9—11、14—8）19 ラドニッキ・ベルグラード（ユーゴ）

ラドニッキ・ベルグラード 25（12—9、13—8）17 スパルタク・キエフ

◇第7回女子カップ・オブ・カップス決勝

SC・マグデブルグ（東独）27（13—13、14—8）21 RK・オシェイク（ユーゴ）

RK・オシェイク 25（11—10、14—9）19 SC・マグデブルグ

1勝1敗、46—46の同点だが、相手のコートでの得点が21—19のためRK・オシェイクが優勝

◇第2回女子IHFカップ決勝

オートモビリスト・バク（ソ連）20（11—7、9—7）14 SC・エムポール・ロストク（東独）

オートモビリスト・バク 18（7—5、11—10）15 SC・エムポール・ロストク

注目のグンメルスバッハ×チェスカは、互いにホームゲームを落とすという珍しい結果になった。

第1戦、モスクワへ乗りこんだグンメルスバッハは、西ドイツのエース、ヴンダーリッヒの快技とGKティエルの活躍で4点差をつけて先勝、ストレート勝ちは固いと思われた。

一万三千の大観衆を集めた第2戦、チェスカはすばらしい闘志をみせ、まれにみる好試合となった前半奪われた3点差を追うグンメルスバッハは、後半いちどは逆転に成功したが、チェスカも粘り26分13—13、残り10秒バランのゴールで鮮やかな勝利をあげた。

初のヨーロッパタイトルに輝いたスカ・ミンスクは、ソ連の新鋭チームでカルシャケビッチが2試合で19ゴールを叩き出している。

女子ではスパルタク・キエフがついに9回目の栄冠を飾った。そのままナショナルチームともいってよい布陣は、他を寄せつけない強さがある。

カップ・オブ・カップスはすさまじい展開になり、RK・オシェイクが規定勝ちして二連勝を遂げた。

日本のファンには、おなじみがうすいが、本場の試合はホーム・アンド・アウェイによる二試合制が常識。

乗りこみの不利は否めないところで、そのため、例え敗れても、相手のホームコートで何点奪ったかは、強さの一つの目安になる。

RK・オシェイクはユーゴの名門で、立石電機に加っているイレシュのホームクラブとして知られる。

なお、男子のヨーロッパ・カップの勝者（VfL・グンメルスバッハ、西ドイツ）とカップ・オブ・カップスの勝者(スカ・ミンスク、ソ連）による「ゴールデンカップ」の結果は、次号でお伝えしよう。

加藤のRWは惜敗

日体大卒業後、西ドイツへハンドボール留学している加藤典代選手が所属する「TUS・RW・アウエルバッハ」は、このほど今シーズンの全国リーグ（ブンデス・リガ）の全日程を終え18戦8勝6分4敗で南地区4位、惜しくも南北4チームによるプレイ・オフへの出場は成らなかった。

西ドイツハンドボール協会誌（Deutsche Handball Woche）1982.30号

1982年世界男子ハンドボール選手権大会における入賞した12チームのシュートに関する調査と分析

シュート効率は絶えまなく上昇しつづける 10投のうちおよそ6投はその目的を達した

小西博喜 訳

1 調査方法とその評価

シュート効率—全シュートに対するゴールの百分率は、あるチームの攻撃のできばえを評価するのに非常に有効である。したがって、1982年世界男子選手権（WM）の時に、個々のゲームにおける全シュートとその経過について調査がなされた。以下調査結果について総計7つのWMの試合における12位までのチームの値がまとめて報告されている。

そして、調査されたチームのシュート効率が総計7つのWMゲームからの平均値とともにあらわされている。

2 結果

2—1 シュート数

表1は、まず第一にすべての7つのWMゲームにおいて、各チームにより打たれたシュート数の総計である。それによると、最多シュート数は決勝戦出場チームのソ連とユーゴスラビアの手におちた。これらの興味ある結果を評価する際、第一に世界最高のチームは、概してきびしい投球訓練を意のままにこなすということを考慮に入れるべきである。

さらに、個人や協同の組織的なプレー、あるいはチームの戦術的なフォーメーションがまず各々のシュートに先行することの事実を十分認識しておかなければならない。したがって、シュートチャンスの率が高いのはよく考えられた組織的な戦術的フォーメーションの間接的なひとつの証明として評価されうるものである。

これは特にその2つのソ連とユーゴスラビアのシュート数と西ドイツのシュート数を対比してみた時に明らかとなる。

DHB（西ドイツハンドボール協会）選抜はソ連より平均して1ゲームあたり10・5本シュート数が少ない。それは具体的には次のことを意味している。すなわち、西ドイツはシュートチャンスが25％も少なかったことになる。全体的にみると、西ドイツはシュート数に関しては12チーム中ビリから2番目の下位に位置している。この結果は、ソ連と比較して1ゲームにおける西ドイツの攻撃の手際のふがいなさの影響があらわれていることの結果を証明している。すなわち、攻撃においては「まぐれ的な行為」ではシュートチャンスはわずかにしか導けないということである。

表1　7試合(WM), 全体におけるシュート数

国名	シュート数	世界選手権の順位
1．ソ連	300	1
2．ユーゴスラビア	290	2
3．ルーマニア	289	5
4．東ドイツ	280	6
5．スウェーデン	277	11
6．スペイン	277	8
7．ポーランド	269	3
8．チェコスロバキア	267	10
9．デンマーク	260	4
10．ハンガリー	258	9
11．西ドイツ	227	7
12．スイス	210	12

2—2 各チームのシュート効率

表2は、7試合におけるシュート効率を対象にした12チームの順位である。興味あることは、ここでも2つの国（ソ連・ユーゴ）が最も高いシュート効率を示している。特に著しいのはソ連のシュート効率で10投中6投のシュートは効果的であった。表はまた東ドイツのシュート成功率の悪さも明らかにしており、シュート効率は約

表2　7試合（WM）のシュート効率

国名	シュート効率（%）	世界選手権の順位
1．ソ連	68.0	1
2．ユーゴスラビア	63.1	2
3．ルーマニア	60.8	5
4．ハンガリー	58.9	9
5．デンマーク	57.6	4
6．スウェーデン	57.4	11
7．西ドイツ	56.3	7
8．チェコスロバキア	56.1	10
9．ポーランド	55.0	3
10．スイス	52.8	12
11．スペイン	52.7	8
12．東ドイツ	50.3	6

図1
1982年WM上位8チームにおけるシュート効率の比較

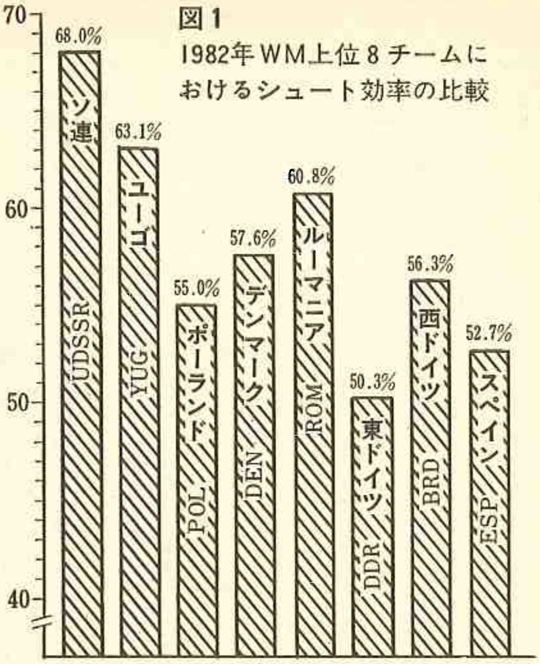
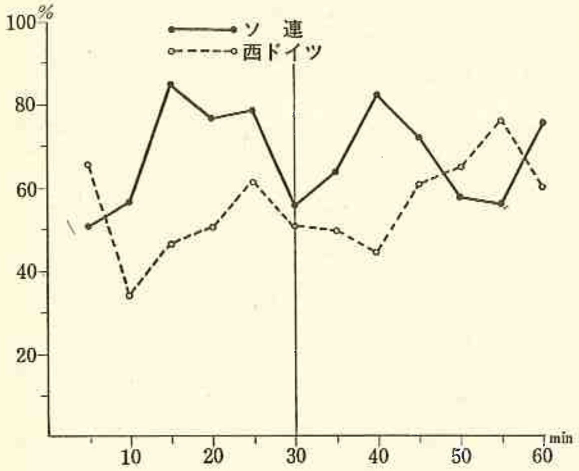


図2
1982年WMのソ連と西ドイツのシュート効率曲線の比較



50・3%で最下位に落ち込んでいる。

図1は、1982年WM上位8チームのシュート効率を今一度グラフにしたものである。

2―3 試合における各種状況のシュート効率

図2は以下の全試合時間(60分)にわたってのシュート効率が5分間づつ区切られた12の区分にしてあらわされている。その際、各々のチームの全試合におけるシュート数と実際の得点数が5分毎の区切りで一括してあらわされた。したがって、ソ連と西ドイツのシュート効率曲線の比較が明らかとなっている。ソ連は12の試合時間区分のうち、9つにおいて、部分的に顕著な高いシュート効率を示している。その曲線は、前半、後半に各々2つの著しい高い時点を描いている。

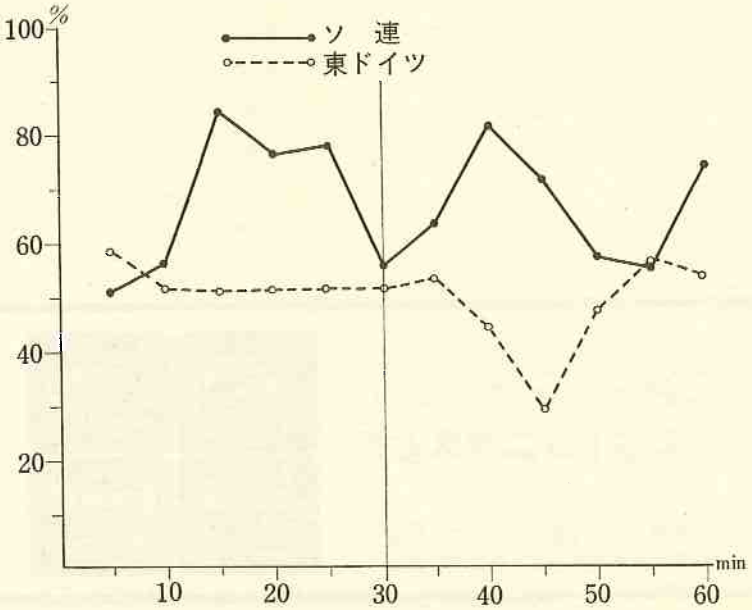
(前半の10~15分、20~25分と後半の35~40分、55~60分)これらの試合時間区分においてあるシュート効率は80%以上にまで達していることが明らかである。(それも7つのWMの試合の平均において!)それに対して西ドイツの曲線は平凡な水準より上に本質的にはよりならされた(水平的な)カーブを走っていることがわかる。(すなわち、顕著な高い時点がみられない!)ただし、前後半の経過においてそれが上昇傾向のカーブを示すならの話であればまた別であるが、

結論的にいえばここでは次のことが明らかである。すなわち、ソ連チームの試合の経過を観察すると、技術―戦術的能率の中でひとつの突発的に急上昇する性質のパターンが起っているということである。それに対して西ドイツは個々の長い試合時間にわたって、ただ中間レベル程度のシュート効率を示しているに過ぎない。

後半の終りごろになって、やっといくらかのシュート効率を高めることに成功している程度である。

図3は、ソ連と東ドイツのシュート効率を対比させたものである

図3
1982年WMにおけるソ連と東ドイツのシュート効率曲線の比較



が、さらに著しい相違点がみられる。それは東ドイツがどの試合時間区分においても半分ペースのおよそ50％の水準を上まわったシュート効率しかあげていないことである。それどころか後半の中ほどではこのチームの攻撃においてひとつの大きな落ち込みさえ伺われる。（40～45分間の間において30％足らずのシュート効率！）

2－4　1982年WMのシュート効率の比較

続いて、WM参加チームによって得られたシュート効率の値がいかに評価されうるかが観察されるべきである。

表3において、1970年以降の4つの主な国際大会の際、各チームの全試合におけるシュート効率がまとめて示されている。

表3　1970年以降の各種国際試合についてのシュート効率

大　会　名	シュート効率（％）
世界選手権　(1970)	41.3
オリンピック (1972)	49.1
世界選手権　(1974)	50.5
世界選手権　(1982)	57.6

それによれば、1970年と1982年の間に世界最高のチーム等は、シュート効率を41・3％（10投中4投の得点）から57・6％（10投中6投は得点になる）へ高めることができた。これは具体的にいえば12年以内でシュート効率はおよそ50％近く高めることが可能であったということである。

この非常に大きな効率上昇の原因は、技術－戦術的領域、例えば60年代の走る技術的本質(run play)から組織的でより効果的なコンビプレイ（combination play)、またより広いトレーニング範囲の運動領域、そしてより大きなトレーニング強度の習得などの訓練が重要な鍵となっていると考えられる。

2－5　個々のチームのシュート効率の比較

表4では、同じ大会における総計7つのチームによって得られたシュート効率の数値がまとめてあらわされている。すべてのチームは多かれ少なかれシュート効率の漸進的な上昇傾向をあらわしている。

表4　各大会ごとのシュート効率の比較
（太線の数値は各々の大会の優勝チームの値である）

国　　名	WM 1970	オリンピック 1972	WM 1974	WM 1982
ソ　連	—	52.3	59.5	**68.0**
ユーゴスラビア	51.1	**58.1**	50.0	63.1
ポーランド	—	—	46.4	55.0
デンマーク	39.2	—	35.9	57.6
ルーマニア	**40.3**	47.3	**52.4**	60.8
東ドイツ	44.1	50.3	53.8	50.3
西ドイツ	40.2	43.7	—	56.3

面白いことに、ただひとつ東ドイツだけが1982年のWMは50・3％というシュート効率で1974年のWMで得た値に達しなかっただけでなく、1972年のオリンピックの時の値に逆戻りしてしまった。各々の優勝チームによって得られた値を比較すると、1982年のソ連は1970年の覇者ルーマニアと同様に世界の覇者となるために、70％程度のシュート効率の向上を必要としたことが明らかにされた。

3　総　括

1982年のWMにおいて、他のチームと比較して西ドイツによって得られた数値は、とりわけ強調されるべきである。すべての結果（シュート数、シュート効率）については、WMの試合における各々のチーム成績の順位がほとんど明白に証明している。7つの試合経過において、特に西ドイツは攻撃面における明確な技術－戦術上の効率向上を達成することに失敗した。

その原因はとりわけ戦術の分野（単なる「その場まかせの試合」）に求められる。

したがってひとつの点で、WMに向けてこのチームの準備プラン上に「結果」がその事実を裏付けしている。

それはコンディションづくりの点において、このチームは多くのことを自ら確認することができたということである。（図2を見よひとつのシュート効率の増大が試合の終りごろにあらわれていることでも明らかである）

総評

関東学生春季リーグ戦

学連委員長　浜田　浩和

■男子1部■

筑波4シーズンぶりの優勝

関東学生春季リーグ男子1部は4月23日から5月21日まで、東京駒沢屋内球技場と同体育館で開催された。春季リーグは各校とも主力選手が卒業して、新チーム編成まもなくで、混戦が予想された。リーグ前の予想通り筑波、日大、国士、中大の間で優勝争いとなった。この中で中大が、第4戦の法大に22—23で敗れる波乱が起きた。また慶大は、この4校と全て5点差以内の接戦を演じ苦しめた。第4戦を終り筑波、日大、国士が4連勝でトップに並び、前述4校による星のつぶし合いで、優勝の行方が決まる運びとなった。

第5戦に、優勝候補最有力の筑波×日大戦が行なわれた。前半立ち上がり、日大・田口の得点でリードしたが、筑波も朝生、杉森らの得点で追い上げ、前半13—10の日大リードで終了した。後半20分まで日大は3点のリードを守ったが、残り10分筑波は5連続得点により逆転し、結局23—22で筑波が大金星を上げた。中大は第4戦で法大に負けムードが悪くなっているが、第5戦の国士には、実方、清家らの活躍で22—18で勝った。

後半戦筑波は、朝生、原井らの活躍で中大を25—19で破り、依然として全勝である。日大×国士戦が激戦となった。前半15分日大は6—3でリードしていたが、国士も青柳、綿引らの得点で、10—10で折り返した。後半25分17—13で日大がリード、このまま終了かと思ったが、国士の猛反撃で連続3得点、しかしここでタイムアップ17—16で日大の辛勝だった。この時点で、国士、中大は2敗している為、優勝圏外に去った。

最終戦、筑波が国士に勝てば全勝優勝、負けて日大が中大に勝てば、得失点差で優勝が決まる。しかし、この場合日大は中大に12点差以上で勝たなければ優勝出来ず、苦しい状態である。筑波は前半12—で国士をリードしているが苦しい状態で後半に入った。後半に入ると、筑波は吉兼、田中らの得点により国士をつきはなし24—19で勝ち、4シーズンぶりの優勝を決めた。日大は中大に23—18で勝ち1敗を守り2位となった。

【戦績】

日付	チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
▽4月23日	筑波大	30	15—9	15—11	20	日体大
	国士大	19	12—6	7—6	12	法大
	中大	25	13—9	12—7	16	早大
	日大	27	13—13	14—9	22	慶大
▽4月28日	国士大	23	10—8	13—8	16	日体大
	中大	33	23—19	10—11	30	慶大
	日大	30	13—7	17—11	18	早大
	筑波大	32	17—13	15—8	21	法大
▽5月6日	日大	28	15—8	13—14	22	法大
	中大	31	17—11	14—10	21	日体大
	国士大	27	12—11	15—14	25	慶大
	筑波大	35	19—13	16—7	20	早大
▽5月10日	国士大	28	13—7	15—10	17	早大
	法大	23	8—7	15—15	22	中大
	筑波大	22	14—9	8—10	19	慶大
	日大	24	12—7	12—6	13	日体大
▽5月13日	慶大	21	11—10	10—9	19	日体大
	法大	32	19—14	13—11	25	早大
	筑波大	23	13—9	10—13	22	日大
	中大	22	13—12	9—6	18	国士大
▽5月15日	早大	31	19—9	12—8	17	日体大
	筑波大	25	14—10	11—9	19	中大
	日大	17	7—6	10—10	16	国士大
	慶大	24	13—9	11—9	18	法大
▽5月21日	慶大	24	14—2	10—8	10	早大
	日体大	26	10—13	16—9	22	法大
	筑波大	24	12—8	12—11	19	国士大
	日大	23	10—6	13—12	18	中大

（順位）

①筑波大（7勝）
②日大（6勝1敗）
③国士大（4勝3敗）
④中大（4勝3敗）
⑤慶大（3勝4敗）
⑥法大（2勝5敗）
⑦日体大（1勝6敗）
⑧早大（1勝6敗）

（優秀選手）

GK　渡辺裕昭（国士大）
　　吉兼敦生（筑波大）
FP　原井進（筑波大）
　　杉森弘幸（筑波大）
　　田口隆（日大）
　　内藤裕治（日大）
　　実方智（中大）

（得点王）

加藤元規（早大）72点

■女子1部■

日体大、激戦を抜け出す

男子に優る大激戦だった。リーグ前の予想通り日体、筑波、東女の間で優勝が争われた。中でも筑波は、昨年の東、全日本インカレの優勝メンバーが不動で最有力候補だった。最初のカード、筑波×東女戦。筑波は高木、中田を世界ジュニア予選で欠き、東女も田島、二村を負傷で欠き、互いに苦しいチーム編成となった。第1戦前半筑波は鈴木の活躍により6—4とリードしたが、後半東女の小池、篠原らの得点により14—14と分けた。第2戦、筑波が前半東女

のミスにより8—1と大量リードをしたが、後半東女は宮脇、小池篠原らの活躍で猛反撃したものの、前半のリードが響き、惜しくも14—12で敗れた。

第2カード、筑波×日体戦。日体も小口、吉岡をジュニア予選で欠き苦しいチーム編成となった。第1戦、前半筑波は河原の得点などにより10—5とリード、意外な試合運びとなった。後半に入っても筑波は小刻みに得点し、19—12で日体に圧勝した。

第2戦は、第1戦と逆に前半は9—7の接戦で日体がわずかのリードだったが、後半に入り日体の動きが俄然良くなり、23—14と筑波に圧勝した。

第3カード、日体×東女戦。この試合によって優勝の行方が決まる。この時点での筑波の自力優勝はない。日体が優勝する為には2勝、もしくは1勝1分で筑波が残りを2勝した場合は得失点差による。また、東女が2勝して筑波も2勝すれば、得失点差による。第1戦前半は、11—9と接戦で日体わずかのリードで終了。後半東女は、日体の厚いディフェンスを攻めあぐみ、21—15と日体が圧勝し、この時点で東女の優勝は消えた。

第2戦は好ゲームが演じられた。前半東女は内山、宮脇らの得点により10—8でリード。後半に入り東女は、内山、宮脇が次々と退場したが、良く守り、残り10分で17—13とリードし勝ちペースになった。

しかし、日体の猛反撃、残り3分小口の得点で逆転、終了間際に東女・大畑の得点で引き分けに終った。

この結果、筑波が残り試合を2勝しているため、日体との得失点差となったが、日体が20ポイント差で上回り、2シーズンぶりの優勝が決った。

【戦績】

▽4月22日
東女体大 27（17—3, 10—3）6 東学大
日体大 33（18—1, 15—4）5 日女体大

▽4月23日
日体大 23（12—5, 11—5）10 日女体大
東女体大 18（7—7, 11—7）14 東学大
筑波大 15（5—8, 10—5）13 茨城大

▽4月24日
東女体大 17（10—6, 7—2）8 茨城大
筑波大 28（15—9, 13—4）13 東学大

▽4月27日
東女体大 24（12—5, 12—5）10 茨城大
筑波大 33（18—6, 15—1）7 東学大

▽4月29日
東女体大 17（6—5, 11—7）12 日女体大
日体大 25（10—7, 15—7）14 東学大
筑波大 24（14—11, 10—2）13 茨城大

▽5月1日
東女体大 16（11—7, 5—6）13 日女体大
日体大 27（12—7, 15—4）11 東学大

▽5月5日
日女体大 15（8—3, 5—8）11 東学大
日体大 19（12—6, 7—8）14 茨城大
筑波大 14（8—10, 6—4）14 東女体大

▽5月8日
東学大 18（8—9, 10—7）16 日女体大
日体大 27（15—3, 12—5）8 茨城大
筑波大 14（6—11, 8—1）12 東女体大

▽5月11日
日女体大 13（7—6, 6—6）12 茨城大
筑波大 19（9—7, 10—5）12 日体大

▽5月15日
日体大 23（14—7, 9—7）14 筑波大
日女体大 9（6—2, 3—6）8 筑波大

▽5月21日
茨城大 17（8—6, 9—9）15 東学大

▽5月22日
茨城大 21（11—9, 10—4）13 東学大
筑波大 23（12—4, 11—5）9 日女体大
日体大 21（10—6, 11—9）15 東女体大

▽5月25日
筑波大 21（11—6, 10—3）9 日女体大
日体大 18（10—8, 8—10）18 東女体大

〔順位〕
①日体大（8勝1敗1分）
②筑波大（8勝1敗1分）
③東女体大（6勝2敗2分）
④日女体大（3勝7敗）
⑤茨城大（2勝8敗）
⑥東学大（1勝9敗）

〔優秀選手〕
GK　久保真理子（筑波大）
FD　山本美幸（日体大）
　　石原房枝（日体大）
　　李　恵美（日体大）
　　河原敦子（筑波大）
　　山口順子（筑波大）
　　小池宏子（東女体大）

〔得点王〕
金平裕美（筑波大）52点

私の新著紹介

ボール投げスポーツの基礎理論
――ハンドボール競技をモデルとして――

新井　節男

可愛い子猫が毛玉にそばえるように幼若な動物は何か転がる丸いものに興味を示します。私たち大人でも精神的に安定した明るい気持ちで余裕のあるとき、ボールが転がってくるとこれを受けとめ、つぎに誰かに投げ返してあげようとします。そしてもっと活発な人は近くに来たボールはこれを受けとめ、投げ返したり、打ち返したり、蹴り返したりするという約束事があるかのようにボールを追って身体を動かします。

このような因果関係とも思われることから生まれたボール運動は現代スポーツの中に数多くあるのですが、この中でも素手でボールをつかみ、これを手渡しながら進め、全力でゴールに投げ入れるという最も簡単なルールのハンドボールをモデルとしてその競技の周辺に存在する自然科学、人文科学、社会科学的現象を幅広く見つめてその本質をさぐろうという試みをしてみました。

まずスポーツを行う主体である人体の動きのメカニズムを筋肉の収縮と関節作用、その反射回路と中枢神経系の支配という運動生理学の面から見ていきます。このスポーツの最大の特徴である「投げること」に関してはボール投げの器官としての腕・手の誕生とその役割を系統発生学とバイオメカニズムの面から見ていき、これを前提としての実際の練習方法論を進めていきます。ボールを受け渡ししながら「走ること」のためには直立二足歩行のヒトの移動能力について知らねばならない多くの問題があります。体内に酸素をとり込まないでも運動できる能力と、より多くの酸素をとり込んで強い運動を長くつづける能力の限界、推進力を生じる下肢の構造と筋肉のつき方を知って、直進走行と後方走行・ジグザグ走行また急発進・急停止の走法の効果的な練習方法の開発などについて検討していきます。

基礎体力のうえに競技特性に合った基礎競技を獲得し、これをつなぎ合わせていくつかの戦術をつくり、相手の実力や特性・状況にみあった戦術を発動する「戦略」は勝敗に欠かせないものでありますが、古きを知りさらに新しきも知りということから孫子やマキャベリのような古典的戦略から、オペレーションリサーチで用いられるミニマックス理論まで参考となるものを取り上げてみました。

ボール投げスポーツというチームゲームは、チームメートとの間に「ボールという愛」がこめられた実体をゆきさせる、そしてその愛は朽ちることのない栄冠を得るために味方に敵に真剣に全力で投げつけられるものでなければならないと私は考えています。この愛・人間関係・チームワークを支えるものは最終章の「スポーツにおけるルール」であります。スポーツを律する法、行動基準としてのルールとモラル、その管理者・施行者としてのレフェリーの役割、在り方についても言及していきます。



スポーツ周辺学は力動的な動きと広い競技場ということからついつい表在する動作学や勝負に直接かかわる技術作戦に目がむけられてその本質にかかわるスポーツ発生の大きな土壌に無関心というようになる風潮があります。私はアメリカ大陸開拓史の風土を背景として勝利至上主義をふりかざすアメリカ型スポーツよりも、努力の過程を評価し紳士育成手段として誕生してきたイギリス型スポーツの方が好きなのです。そしてこの型のスポーツの中にこそ毛毬にそばえる子猫のような純な気持ちがより多く存在し、大らかな人間全体の豊かな心と身体が育っていくものと考えているのです。そしてこのスポーツの本質を追求していくとき、数限りなくまた行きつく先を知らない検索を必要とする問題点、研究対象があることを知りファイトが出てくるのです。

YMCA同盟出版
（二百十五頁　二千四百円
A5判）



ストップ&ジャンプ自在。

グリップ力抜群のニューソール装備、新製品〈スカイハンドスペシャル〉

アシックスタイガーの新製品 スカイハンドスペシャル はストップ&ジャンプが自在にできるハンドボール専用シューズです。
写真の底意匠にご注目ください。複雑なトレッド(溝)をソール全面に刻み込んでいます。これは、ハンドボール特有の、多角的な動きに対応するためで、とくに拇指球下のリング状意匠はグリップ力を飛躍的に高めます。このため、選手は思うようにストップでき、また思うようにジャンプすることができます。
●甲被はステア表革と銀付ベロアの2タイフ。●独創のカップソールは甲被を食わえ込む設計で、足ブレを防ぎます。●大型ヒールカウンターはカカトをガッチリ保持し、選手の動作能力を高めます。
●軽さ、クッション性も卓越。
ストップ&ジャンプの スカイハンドスペシャル で栄光をつかんでください。

asics TIGER®
Handball Shoes

スカイハンド スペシャル

NEW

スカイハンド スペシャル(THH705)
●甲被はステア表革(ホワイト)、銀付ベロア(レッド、ロイヤルブルー)、裏地はナイロン。●アウターソールはラバーのカップソール。●ロイヤルブルー×ホワイト、ホワイト×レッド、レッド×ホワイト。●サイズ 22.5〜28.0cm
標準小売価格 ¥12,000

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第二一九号
昭和四十年六月　日第三種郵便物認可
昭和五八年五月二十五日印刷
昭和五八年六月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一　編集兼発行人　荒川清美
電話　代表(467)七〇九七
振替　東京　六－五八三四八番
定価三百五拾円
(年間購読料三千三百円)

